九月　九州南北朝
十月　南北朝
十月　九州南北朝
観応三年・正平七年
六代当主冬綱
二月
閏二月十五日
九州南北朝
文和元年・正平七年
十一月九州南朝方
〈九州南北朝時代、針摺原の戦いで南朝が勝利し菊池軍の侵攻で冬綱が軍門に下る〉
文和二年・正平八年
二月**針摺原の戦い**
四月　九州南朝方
七月　九州南朝方
十月　鎮西探題方
十一月鎮西探題方

四―一三五一）から大友氏泰（一三五一―一三五二）となる。
探題一色範氏が佐殿（すけどの）方（大宰府、直冬、少弐）と筑前国席田郡月隈・金隈で敗戦。
尊氏、義詮は南朝方に下り**正平一統**が成立し南朝方の後村上天皇から直義・直冬追討令の綸旨を得た。尊氏軍は東進し駿河国、相模国で直義軍を破り直義は捕縛される。
尊氏に同調、大友氏時も南朝方に。直冬討伐の綸旨で一色が南朝方と協調し勢力回復。
（一三五二）
尊氏方として直義方討伐に戦功を上げ筑後、豊前、下野二郡の守護に補任された。
直義は浄妙寺（鎌倉市）境内の延福寺に幽閉の身で急死。高師直と同じ命日二十六日。
南北朝の正平一統が崩れる。これにより一色は懐良親王に距離を置き、そこに孤立していた少弐頼尚は宮方の菊池武光と結び、鎮西探題一色氏と対峙した。
豊後、豊前の大友、宇都宮各氏は正平一統が崩れにより南朝方から離反した。
（一三五二）九月二十七日改元
一色範氏は肥後、筑後の宮方の支援を得て大宰府の直冬、少弐頼尚を破り共に南朝に帰順した。直冬は長門国豊田城に逃れた。

探題一色直氏兵力二万五千が大宰府浦ノ城の少弐頼尚兵力三千を包囲し、筑後国高良山に駐屯の宮方菊池武光は少弐冬資の支援要請で兵力一万を差向け、針摺原（筑紫野市）で一色範氏、直氏父子を破る。征西府軍は入府し、その翌日に肥後国に退いた。
一色方は先陣大友氏時（当主、父氏泰は隠居）島津氏久、龍造寺氏ら。
宮方征西府を肥後国菊池から高良山に移した。
菊池軍は一色軍を筑前飯盛山で再度破る。少弐頼尚は征西府方となり南朝方は優勢に。
一色範氏は長門に遁走した。少弐頼尚は征西府方（宮方）から幕府方についた。
探題直氏は菊池武重に日向山で敗れ千葉胤泰の肥前小城城に逃れた。

文和三年・正平九年（一三五四）

四月　南朝　後醍醐天皇の崩御後、指導的な立場にあった北畠親房が死去。南朝の衰退始まる。

五月　南朝　直冬は反尊氏派・旧直義派の斯波。桃井、山名、大内氏らを率いて上洛を開始した。

八月**六代当主冬綱**　弟**公景**以下多くの一族を討死させた功労として豊前延勝寺・今富庄・中元寺らを与えられ、豊前守護職に補任された。冬綱は筑後国守護職の地位（一三三三―一三四九）にあったが宮方優勢で、筑後国が実質宮方支配となり配置転換された。*36

文和四年・正平十年（一三五五）

一月　南朝　直冬は南朝方、尊氏を追出し京を一時奪還。三月、尊氏の反撃で石清水八幡に退いた。

八月　九州北朝方　探題が二年間不在、南朝方の少弐、大友が反宮方に転じ、**宇都宮冬綱**も追従。

九月　九州南朝方　懐良親王は少弐頼尚を味方につけ肥前小城城の一色直氏を攻めた。

十月　九州南朝方　菊池武澄は晴気城（佐賀県小城市）の一色方千葉胤泰を攻略し、反転して豊後に向け少弐軍が合流し総勢一万は日田・玖珠・由布・狭間を経由し府内の大友氏時を**降した。**この降伏は、父氏泰が多々良浜の戦い以来少弐頼尚と親交あり、南朝方の狙いは探題一色の追い落としとの内通あり。南朝軍は大友軍を先鋒として豊前国に進攻し、大神・豊前宇佐で宇佐大宮司が降参し、城井と進み豊前守護の**宇都宮冬綱**を降し、筑前殖木（直方市）から博多入り。一色範氏・直氏父子、諸将を降し、宮方優位となる。*36

一色範氏、直氏父子は探題の本拠博多を放棄し長門国に逃亡。後に範氏は帰洛し隠遁。尊氏の激怒を買う。城井宇都宮**冬綱**の養子**家綱**（下野宇都宮九代当主公綱の子）は、探題一色範氏の逃亡で尊氏方に。

延文元年・正平十一年（一三五六）

十月　九州南朝方　一色直氏が長門国より再侵入、菊池武光が筑前国で阻止。以降探題の復帰を断念。

十一月　下野宇都宮公綱が歿す。享年五十五。

延文三年・正平十三年（一三五八）

一月　九州南北朝　鎮西探題は事実上不在となり、少弐氏、大友氏が南朝方から離反した。

四月　九州南朝方　南朝軍は島津氏討伐で制圧。肥前国府（小城）を攻略して在陣し。九州全土制圧。
四月　幕府　南朝方の九州支配を阻止の為、出陣をしようとしていた**尊氏が病死**。
九州南北朝　宮方を離反していた大友は菊池の侵攻から高崎山に籠る。
十一月九州南朝方　九州最後の足利勢力日向畠山直顕を菊池武光が破った。
十二月　幕府　足利義詮（あしかがよしあきら）は征夷大将軍に任命。
十二月九州南朝方　懐良親王軍が再侵攻、高崎山城攻撃で本陣の由布院を大友勢が背後を突き退却。

延文四年・正平十四年（一三五九）

三月　九州南朝方　懐良親王軍一万五千が大友追討で三度目侵攻。大友氏時籠城の高崎山城を包囲したが、武家方に寝返った少弐軍の援軍が向っているとの情報で南朝軍は退却した。
四月　九州北朝方　少弐頼尚が大宰府に四万の兵を集め、豊後大友氏と薩摩島津氏と連動して南朝方菊池氏の本拠隈府城（わいがじょう）（熊本県菊池市）を三方攻め攻略を進めていた。

七月**大保原の戦い**　宮方は懐良親王を擁し筑後川を挟み高良山に、武家方少弐頼尚は北方の花立山の山隈城を本陣として対峙、八月両者硬直状態の中、菊池方は幕府方の動きを察知し、七日危機回避の為、先手攻勢で大宰府に向けて出陣し、宮方は菊池武政の偵察隊が武家方に接近したが、武家方は交戦せず大保原（福岡県小郡市・太刀洗町・久留米市）に退き、宮方は少弐の寝返りをなじり少弐軍へ仕掛け、それを引き金に戦いに激突した。少弐は大敗し大宰府に敗走した。両軍併せて五千の戦死者。

【宮方四万（南朝方）】+∴戦死

懐良親王・菊池武光、±赤星武貫、+筑後**宇都宮隆房**（城井宇都宮家五代当主頼房の第五子、懐良親王落馬の危機を救い戦死、その忠誠を宇都宮神社（熊本県木葉町）に祭祀している）、伊予**宇都宮貞久**・+子**懐久**・孫**久則**（伊予に逗留の懐良親王に従い豊前国仲津に移るも城井宇都宮家が北朝方であり南朝方の菊池氏の本拠肥後国に移り八代を本拠とする。**久則**は南朝方の凋落後、蒲池武久の娘と結婚し、蒲池家を継ぎ蒲池久憲と名乗る）、+弟**宇都宮貞邦**、蒲池武久、草野永幸、五条頼元、高野氏、新田氏ら。

【幕府方六万（北朝方、武家方、尊氏方）】＋：戦死
少弐頼尚、子＋直資（ただすけ）、大友氏時、**城井宇都宮冬綱**（六代当主、養父は頼房）、**秋月種高**
（七代当主）、豊前守護代＋**西郷顕景**、筑後国の武家方、肥前国の松浦、龍造寺、深堀。

延文五年・正平十五年（一三六〇）
　鎮西探題　幕府より探題一色直氏が召還され、斯波氏経（しばうじつね）が後継となる。
康安元年・正平十六年（一三六一）延文六年三月二十九日に康安に改元
七月　九州南朝方　菊池武光は大宰府有智山城を攻め少弐頼尚は大友の元に逃れ、菊池は大宰府を制圧。
八月　九州南朝方　宮方菊池武光が少弐冬資を破り**大宰府に懐良親王を迎え征西府の本拠**とした。後醍醐天皇が親王に下向を命じてから二十五年経過、以降十一年間征西府の全盛期が続いた。
十月　　幕府　二代将軍足利義詮は南朝方の東進上洛阻止で斯波氏経を鎮西探題として下向させた。氏経は大友氏時を頼りに海路で豊後国府内、高崎山城に入城。義詮は北朝方少弐、松浦党、島津、阿蘇、相良と連合し南朝方征西府攻撃を命じ、後光厳天皇も追討の綸旨。

康安二年・正平十七年（一三六二）
九月　九州南朝方　菊池武光の南朝軍三万は四度目の大友、探題斯波、少弐の籠城する高崎山城を包囲。
貞治元年・正平十七年（一三六二）九月二十三日に貞治に改元
　幕府　直冬を支持していた南朝方の周防国大内氏、山名時氏の子兄弟（伯耆、出雲、隠岐、因幡、若狭、丹波、丹後各国の守護）が尊氏に帰服。直冬は備後から石見に逃れた。
十月長者原の戦い　南朝方の高崎山城攻撃の隙をつき、探題氏経は嫡子松王丸を総大将に少弐冬資軍七千で大宰府を攻撃。武光は豊前より戻り長者原（福岡県粕屋町）で探題軍を破った。
十二月九州南朝方　菊池武光の南朝軍は**五度目**豊後国に侵攻し、北朝方の籠城する高崎山城を包囲した。大友の要請した幕府の援軍もなく籠城は半年間に及んだ。

貞治二年・正平十八年（一三六三）
五月　九州北朝方　高崎山城に籠城の大友氏時は南朝方に降伏し、証として剃髪した。少弐頼尚は土佐国又は頼尚、冬資父子は海路で周防の大内に逃避、斯波氏経は大友氏継と周防国大内のもとに逃れ、氏経は帰洛し出家、隠遁。

貞治四年・正平二十年（一三六五）
幕府　二代将軍足利義詮は鎮西探題斯波氏経に代わって備後・備中守護十八歳の渋川義行を任命したが、懐良親王率いる征西軍の抵抗で九州入りできず更迭された。
貞治五年・正平二十一年（一三六六）
六代当主冬綱　歿す。享年七十九。
七代当主家綱　新当主、五十八歳（生一三〇八年―没一三六八年）下野宇都宮家九代当主公綱の子。
〈九州探題了俊、九州平定〉
正平二十二年（一三六七）南朝勢が一時京都を占拠するも敗れ以降の南朝勢による北朝への圧力は無くなる。
十二月　幕府　足利義詮が歿す。十一月に子義満十歳に政務を引継ぎ第三代将軍となる。探題細川頼之が補佐し後見人。義満は楠木正成の子正儀を味方にするなど北朝政権は安定化した。
応安元年・正平二十三年（一三六八）
二月　征西府　懐良親王と菊池武光は東征軍七万騎（島津・伊東・原田・秋月・三原・草野・松浦・星野・平戸・千葉・大村・山鹿）で東上を開始し長門、周防に進軍。瀬戸内海道の制海権なく北朝方の大内により進軍を阻まれ挫折。その後の征西府衰退へと向かった。
七代当主家綱
八代当主直綱　歿す。享年六十一（生一三〇八年―没一三六八年）。
三月　大友　当主となる。四十三歳（生一三二五年―没一三八一年）**城井重綱**（父は**冬綱**）の子。氏時が病死。子の氏継が家督を継いだ。
応安二年・正平二十四年（一三六九）
九州南朝方　朝鮮半島、中国沿岸で倭寇の活動が活発。明朝は倭寇取締を条件に懐良親王に「日本国王良懐」の冊封を出した。懐良親王は同冊封を背景に九州に一大勢力を築く。
応安三年（一三七〇）
九州探題　将軍補佐の探題細川頼之が今川貞世（法名了俊）を九州探題に任命し派遣。
幕府は周防国・長門国の大内弘世、義弘父子に支援を命じた。
今川了俊　備後・安芸のの守護も兼ねこれらの力を結集し大宰府、征西府攻略を三方攻めとし、子今川義範を豊後に、弟今川仲秋を肥前松浦に配置し、了俊は豊前門司から入る計略。

了俊は国東の豪族原田氏能と連携し大友家の家臣を統率し、氏継の弟親世を擁立した。
氏継は反発し南朝方で府内を拠点に、親世は高崎山城を拠点に挙兵。豊後国内は南北朝方に分裂した。家督は大友親世になる。了俊の政略・軍略に征西府は圧倒され後退。
探題今川了俊が豊前守護となる。**家綱**、子**直綱**は宮方に応じ高畑城（福岡県みやこ町木井馬場、一説では築上町松丸の居館）で挙兵。探題今川の討伐軍は高畑城を落城。
これ以降、**豊前の守護職は宇都宮家が就くことはなく同家の衰退**を招いた。
探題今川了俊により南朝方勢力少弐、菊池が衰退。九州は安定期を迎えた。

六代当主冬綱

応安四年（一三七一）　**九州探題**
七月　**九州探題**　今川了俊の嫡子義範が田原氏能に護られ高崎山城に入城する。
八月　九州南朝方　菊池武光率いる南朝軍は**六度目**の高崎山城を包囲し、翌年十二月までに及んだ。
応安五年（一三七二）
二月　**九州探題**　探題の弟今川仲秋は、肥前に侵攻した南朝方の菊池武政を攻め滅ぼした。
八月　今川仲秋は筑前で菊池武安を撃破。大宰府を攻略した了俊と合流。
十二月　**九州探題**　探題の弟仲秋が肥前国に上陸し、松浦党と結託し大宰府奪還で北朝方を結集した。
応安六年（一三七三）
二月　**今川了俊**　周防国大内弘世の支援を得て、了俊は七万の大軍を率い門司より豊前国に上陸した。
九州南朝方　菊池武光は了俊軍の大宰府進攻で、大友氏継に高崎山城の包囲を任せ大宰府に帰還。
今川了俊　了俊に連動し、高崎山城に籠城の義範は氏継を破る。仲秋は肥前国から大宰府攻撃へ。
八月　**今川了俊**　北朝方は大宰府を三方面から攻め、征西府方懐良親王・菊池武光は高良山に逃げた。
十一月　九州南朝　征西府方大友氏継が豊後大野で挙兵。征西府軍は菊池城に退却。了俊軍が各地で勝利。
十二月　九州南朝　菊池家十五代当主菊池武光が病死。
応安七年（一三七四）　五月に菊池武光の子菊池武政が三井郡北野で戦死。
六月　**九州探題**　了俊は川崎氏の籠る生駒野城を陥落。
八月　菊池武光の孫で十二歳の加賀丸が三井郡福童原（小郡市）で了俊に破れ菊池城へ退却。
了俊は山門郡蒲池の陣から**宇都宮貞久**の城を陥落させた。

今川了俊の論功は千葉に小郡郡、大友氏継に豊後、少弐冬資に築後・肥前、伊東に日向、大内に周防・長門・豊前、今川仲秋に肥前佐嘉・杵島・高来の三郡、島津に薩摩。

応安八年（一三七五）　九州南朝方

三月　**今川了俊**　懐良親王は、菊池加賀丸と相容れず、良成親王に職を譲位し、筑後矢部に入った。了俊は肥後山鹿に入りその後水島に入る。筑後の諸将は領土安堵で探題側につく。肥後人吉の相良氏は探題方、八代の名和・宇土の宇土は南朝方。

八月　**今川了俊**　了俊は、少弐冬資・大友親世・島津氏久の応援を要請したが少弐は出陣せず。了俊の命で島津氏久が少弐冬資を説得し水島に参陣したが、宴中に弟今川仲秋が冬資を殺害した。以降、少弐氏は菊池氏と結ぶ。この沙汰に島津氏久は陣を引き上げ以降了俊と対立した。この結果大隅・薩摩の守護を探題が奪った。以降了俊の戦力は低下し周防国大内義弘の支援を幕府に要請。大内の北九州進出の契機となった。

康暦元年・天授五年（一三七九）　大内の豊前守護職を回復。

永徳元年・弘和元年（一三八一）　歿す。享年五十七。

八代当主直綱

九代当主盛綱　当主となる。三十八歳（生一三四三年―没一三九六年）直綱の子。

四月　**九州探題**　菊池氏最後の攻防。了俊は肥前勢、大友、大内の援軍を得て菊池の諸城を総攻撃し、本拠菊池城が陥落。菊池武朝は脱出し、懐良親王の後継良成親王は宇土へ逃れた。

永徳三年・弘和三年（一三八三）　九州南朝方　南朝　懐良親王、筑後国矢部歿す。征西軍将軍の地位は良成親王に譲る。北畠顕能が歿す。対北朝強硬派の長慶天皇は、楠木正儀の南朝に帰参したことで、和平派の台頭で弟の東宮（後亀山天皇）に譲位した。以降、南朝は弱体化した。

至徳二年・元中二年（一三八五）　南朝方の宗良親王が歿す。

明徳二年・元中八年（一三九一）

七月　九州南朝　了俊に停戦を申し入れ。

八月　九州南朝　名和の八代城陥落、名和・良成親王は探題方に降ったことで両軍は停戦した。

九州探題　征西府軍の残党との戦いは継続したが、了俊は事実上九州を制圧した。

室町時代（一三九二―一五七三）

明徳三年・元中九年（一三九二）

朝廷　足利義満により大内義広の仲介で南朝が解消し五十八年振りに**南北朝が合一**した。義満は、大覚寺統と持明院統の両統迭立（交互に皇位につく）、諸国の国衙領を大覚寺統の所領とし三種の神器を後小松天皇が接収する和平案に合意した。

応永二年（一三九五）

九州探題

筑前後　大内の讒言で探題今川は罷免、京に召還、渋川満頼が補任、大内が後見・豊前守護に。

九州　探題今川の解任後、少弐が筑前守護職に復帰した。筑後は大友が守護職を代々継続。大内の豊前守護で中国から九州へ進出の意欲。少弐・大友が反探題・大内で対抗。

応永三年（一三九六）

九代当主盛綱　殁す。享年五十四。

十代当主家尚　当主となる。三十六歳（生一三六〇年―没一四二九年）盛綱の子。

十一代当主尚直　守綱の子（生一三六八年―没一四〇八）。尚直没年までの間に当主となったが不詳。

四月　**九州探題**　渋川満頼が任命され博多入り。補佐は周防国大内義弘。少弐満貞が菊池兼朝と組んで探題渋川を破る。幕府は大内に鎮圧させ、以降筑前は大内と少弐の対立となった。

応永四年（一三九七）

九州探題　中央では足利義満が引退。義満引退で筑前守護少弐・菊池が挙兵。探題渋川は、大内、大友と共に少弐・菊池を破り大宰府を占拠。少弐は大内により肥前の龍造寺家に逃避。

応永六年（一三九九）

応永の乱　大内義弘は堺で敗死、豊前守護を失職。弟盛見が家督を継ぐ。幕府は盛見の力量を評価し豊前守護に補任（豊前支配百五十年の始まり）、探題渋川氏と並び政務させた。（義満は大内の豊前、筑前への介入に難色、大内は鎌倉公方満兼と結び鎌倉方と戦う）

応永七年（一四〇四）　日明貿易（勘合貿易）始まる。

応永十一年（一四〇八）

十一代当主尚直

殁す。享年四十一（生一三六八年―没一四〇八年）九代当主盛綱の子。

十二代当主俊房

当主となる。（生年不詳―没年不詳）十代当主家尚の子。

応永二十六年（一四一九）渋川義俊が父満頼の**九州探題**を引き継ぐ。

応永三十年（一四二三）**九州探題**渋川義俊が少弐満貞に攻撃され肥前山浦城に逃れた。探題の力が衰退する。

正長元年（一四二八）　**九州探題**は渋川義俊から従弟渋川満直に継がれ、肥前守護を兼任した。

永享元年（一四二九）

十代当主家尚

殁す。享年七十（生一三六〇年―没一四二九年）。

十二代当主俊房

当主交代、生年没年は不詳。この頃五十歳の俊房は二十年以上当主の座にあり、父の家尚の生前において弟盛直四十四歳に当主の座を譲ったのではないか。

十三代当主盛直

当主となる。四十四歳（生一三八五年―没一四六八年）。十代当主家尚の子。

大友　筑前香椎石築地（元寇防塁）、息浜（おきのはま）・怡土荘地頭職を有し、博多の貿易利権を狙う。

幕府　将軍足利義教は筑前を御料国とし大内盛見を代官とした。このころ琉球王国成立。

永享三年（一四三一）

四月　大内　盛見は大友の筑前軍事拠点立花新城（福岡市）を攻め、大友持直は二丈岳に退いた。大内の九州進出で探題・大内勢力に対抗して少弐・大友が組み筑前深江（糸島市）で盛見を討つ。盛見の後継は大内持世が十二代当主、周防・長門・豊前、筑前の守護。大内盛見の戦死で豊前が大友に狙われる危機にさらされた。

城井宇都宮家

永享四年（一四三二）

二月　大内　持世の九州出陣中、弟持盛は盛見の甥満世を味方に付け反乱し持世を追い出す。

三月　持世は石見国に逃亡し国人衆の支持で大内領を奪還した。持盛・満世は大友持直に支援を要請。持世は幕府に要請し大友親綱が豊後国守護、菊池兼朝が筑後国守護となる。

永享五年（一四三三）

三月　幕府　大友持直・少弐満貞追討令が発布され、大内持世軍は少弐満貞・資嗣父子を討ち取り大友持直にも勝利し、大内勢力は拡大した。

四月　大内　持盛は豊前国で、満世は逃亡先の京で討ち取られる。
大内　十二代当主大内持世は二丈岳を攻め、大友持直の弟満貞の嫡子は深江で、満貞は古処山城で討たれ、持直は本国豊後へ退散する。
大内により博多は貿易で繁栄し財力で幕府への金の貸付、領内での造船、博多の輸入貿易拠点独占化を図った。これは細川の堺拠点との競合、博多商人と堺商人が対立。探題渋川満直が少弐の一族に攻撃され守護職にあった肥前神埼で戦死。

九州探題

永享六年（一四三四）　大友持直が挙兵。
永享七年（一四三五）　大内持世は大友挙兵で下向し北九州を平定。少弐は滅亡に追い込まれ対馬国へ逃亡。
嘉吉元年（一四四一）　逃亡の少弐氏は対馬で挙兵。大宰府の復権を狙って上陸するも大内持世軍に敗退。
六月　幕府　将軍義教は赤松邸での御成儀式に出向き、赤松の偽計で斬首。大内持世も参列。
七月　幕府　赤松追討軍により播磨国で赤松は死去し家滅亡。大内持世は赤松邸での負傷で死去。
文安三年（一四四六）　少弐教頼が筑前守護となり大宰府に復帰した。
宝徳元年（一四四九）　大宰府の少弐教頼は大内教弘から攻撃され肥前国の龍造寺氏のもとに逃れた。
宝徳年間（一四四九―一四五二）頃

十三代当主盛直

当主交代不詳（生一三八五年―没一四六八年）。六十歳半ばで二十年以上当主の座。

十四代当主秀房

新当主（生一四二一年―没一五〇九年）。**盛直**は自分の当主交代に倣い子**秀房**に譲る。

応仁元年（一四六七）―文明九年（一四七七）

応仁の乱

足利義政の時、将軍家の後継者争いで管領細川勝元と有力守護大名の内乱が諸国に飛び火し十年に及び**戦国時代の端緒**となった。三代将軍足利義満は権勢をふるったが、六代将軍義教は暗殺され権力基盤が不安定となった。八代将軍義政では正室日野富子との間の子が生れず実弟の義視に後継を譲る。その後見役は三管領の一人細川勝元。ところが、義政に男児が誕生（後の足利義尚）し、母富子は将軍職を継がせたいため、後見人を四職の山名宗全とし、義視・細川勝元に対抗した。三管領の一人畠山家の家督争いが導火線となり両者の戦争が始まる。
大内　周防・長門・筑前・豊前守護大内政弘は西軍で上洛、東軍の将軍義政は大友・少弐に

大内氏討伐を命じた。東軍方少弐教頼は対馬国宗盛直と共に筑前入るも大内方に敗退。長野行種とともに出陣し大友勢と戦った。

十四代当主秀房

応仁二年（一四六八）

十三代当主盛直

文明元年（一四六九）　大友は大内政弘の背後を突き豊前・筑前に進攻。大内方の**十四代当主秀房**は、長野城（北九州市小倉南区）を居城とする長野行種（企救・田川・京都郡の領主、諸説あり平時盛の六男康盛が豊前守として下向し築城し長野と名乗る。又はそれ以前に中原系長野氏が築城）と共に大友親繁に叛き合戦。

四月糸口原の合戦　殁す。享年八十四（生一三八五年―没一四六八年）。

十四代当主秀房

大宰府

文明九年（一四七七）　少弐頼忠は宗氏の支援で大内から大宰府を奪還し将軍義政の偏諱を受け政尚と改めた。

文明十年（一四七八）　大内政弘が幕府から旧領を含む周防、長門、豊前、筑前の守護職を安堵され撤兵。豊筑を還補（げんぷ）された大内政弘のもとへ、彦山・別当が肥後の菊池重朝の使僧として参賀し、座主頼有と子息帥の律師（そちりつし）が山口へ参賀（「正任記」）。

文明十一年（一四七九）　大内政弘は大友と和睦し、豊前・筑前を平定した。

長享四年（一四八〇）頃　当主交代不詳。**秀房**は三十年近く当主の座にあり還暦を迎えた。

十四代当主秀房

十五代当主興房

明応三年（一四九四）　**秀房**は子**興房**十九歳（生一四六一年―没一五四二年）に当主の座を譲った。

明応六年（一四九七）　大内十四代当主政弘が隠居。子義興十七歳（生一四七七年―没一五二九年）が当主に。

青内山の戦い　大内義興軍は少弐・大友勢を追って筑前・肥前に進攻。少弐政資は包囲され自害。

明応七年（一四九八）　玖珠郡で大内軍は大友に敗れ、隣の宇佐郡郡代佐田泰景は大友の捕虜となった。

明応九年（一五〇〇）　八月に東海道沖で明応大地震発生。津波で浜名湖の今切が決壊し淡水から汽水となる。

大内

幕府

城井宇都宮家

管領細川政元に追放された十代将軍職の足利義尹（よしただ）（在位一四九〇―一四九五）が大内義興に匿われ、義興も加勢して京の足利義高・細川政元に対抗して上洛しようとした。足利義高は大友親治・大内高弘・少弐資元・菊池武運・阿蘇惟長に義興討伐を命じた。十五代当主**興房**の嫡男**正房**（十六代当主）に**長房**誕生（十七代当主）。

文亀元年（一五〇一）　**城井宇都宮家は少弐方。**

六月　幕府　大内義興討伐の綸旨が後柏原天皇から下る。大内方仁保氏らの護る豊前国衝馬ヶ岳城（行橋市）を少弐資元と大友親治が陥落。翌月に奪還し豊前から少弐・大友勢は一掃された。義興討伐方の毛利弘元が大内方となる。義尹の仲介で大友親治と和睦。

十五代当主興房

文亀二年（一五〇二）　大内より少弐方の**興房**は本城**本庄城**（築上町）を攻撃された。

永正元年（一五〇四）　大友義鑑（よしあき）誕生。大友十九代当主大友義長の子。肥後菊池能運が病死。守護争いで、大友親治・義長父子は相良長毎等と阿蘇惟長（菊池武経）を擁立、朽網親満（くさみちかみつ）を衛にあたらせる。*32

永正四年（一五〇七）　大内義興は少弐資元と和睦し北部九州の勢力を維持した。

永正五年（一五〇八）　朽網親満は、菊池政孝を攻め、翌年に政孝は自害。*32

六月　大内義興と足利義尹は上洛を果す。七月に義尹は将軍職に復帰、義興は左京大夫・管領代として幕政を執る。義興への軍功の相国寺領の和泉国堺南荘は辞退し寺社本所領の返還を唱えた。義興は帰国を願うも細川澄元らの京都奪還の動きで果たせず。

永正六年（一五〇九）　大内義興の寺社本所領の返還に乗じ、寺社は周防国で押収の所領返還を求め応えた。

十四代当主秀房

殁す。享年八十九（生一四二一年―没一五〇九年）。

十五代当主興房

当主交代不詳（生一四六一―没一五四二年）、当主の座は二十年。

十六代当主正房

興房は、父秀房の生前中に**正房**三十一歳（生一四七八年―没一五六一年）に当主交代。

城井宇都宮家

正房は十代将軍足利義稙の御前で一子相伝の**「艾蓬の射法」**を礼射し太刀を賜った。

【艾蓬の射法（豊治の射法）】宇都宮家に古くから伝承された弓の射法で、武門の誇りと格式の象徴。蓬の茎を矢にして射るもので、吉凶の占いや戦勝祈願に用いられた。元寇の役では鎌倉鶴岡八幡宮社前で、室町期には将軍の御前で十回以上射行された。宇都宮家の家紋は三つ巴で弓射に用いる武具であった鞆を形象化したもの。

永正六年（一五〇九）―永正十年（一五一三）　この間、大内義興と反幕府勢力との戦いが京周辺で展開。

如意ヶ嶽の戦い　洛中で義興二万は細川澄元三千に勝利し澄元は四国に逃れる。足利義澄は近江国で義興に勝利し、続いて摂津・和泉国に進攻し義興方に勝利した。

船岡山城の戦い　足利義澄の急死。義興は船岡山城（京都市）の戦いで細川澄元を破り京を奪還した。大内義興は娘を足利義維に嫁がせ将軍家と姻戚関係を結んだ。

永正十年（一五一三）　将軍足利義尹が足利義稙（よしたね）に改名。

大内　義興と幕府の動きが乖離し出雲国尼子氏が石見国への侵攻を開始した。

島津　分家伊作家から相州家当主運久の養嗣子忠良が両家の家督を七年前に相続し領主に。忠良は島津家中興の祖、島津宗家で当主二代が病死、養子忠兼が継ぐが守護職の基盤弱く忠良に支援を要請、忠良の子貴久が十五代守護職となる。分家薩州家五代実久が抗し、後に忠兼が勝久と改名し守護に復帰すると、以降天文十九年（一五五〇）まで実久・忠兼と忠良・貴久の盟主争いが続くも鉄砲戦よる戦法の変化・戦力向上に貢献し、薩摩内の島津家内部抗争を忠良が制した。忠良の孫四兄弟、義久・義弘・歳久・家久が島津宗家を盤石と成した。忠良の功績は、琉球を介した対明貿易、鉄砲の大量買付、領内の通行基盤整備、養蚕産業の振興、家臣団の育成と教育、善政にある。

永正十二年（一五一五）　大友義鑑十三歳が二十代当主となる。弟重治を菊池家に入れ肥後を支配。後に重治は独立し大内家と結ぶ。*19

永正十三年（一五一六）　大内に日明貿易（遣明船派遣）の恒久的な管掌特権が大内に与えられた。

八月　大友　田染荘政所古庄治重父子が謀反嫌疑で監禁され、その後宇佐宮番長永弘氏輔に匿れる。

朽網　古庄の上官、朽網親満は嫌疑を恐れ道場寺（行橋市）に逃亡・潜伏。一党は、高勝寺（玖珠城）や松木山城に立て籠もったが攻略された。親満は大友親綱の子、大聖院宗心を擁立し大野・直入・玖珠郡の勢力の結集を画策、国外へ追放されていた国東、田原家の帰国を待ったが、両者は呼応せず。親満は道場寺から伊良原へ移動した。*32

永正十四年（一五一七）　朽網親満は敗北して彦山に逃れ、尚抵抗の姿勢を示した（「永弘文書」）。

永正十五年（一五一八）　朽網親満は高崎山城にて蜂起するも大友義長に討伐され親満死去。

十月　大内　出雲国尼子は勢力を拡大し、大内義興は幕府管領代を辞して山口に帰国。

〈中国・北九州を大内が平定・城井宇都宮家は大内方〉

大永三年（一五二三）

八月　毛利元就が当主となり吉田郡山城城主に、元春が吉川家、隆景が小早川家に入る。*14

大内　尼子が石見国を制圧。安芸国の武田・友田を味方に、毛利元就も大内方から尼子方に。

大永四年（一五二四）大内義隆十七歳、父義興と共に安芸に出陣するも尼子方の毛利元就に敗退。

大内　義興は尼子方友田の拠点桜尾城（厳島）武田の拠点佐東銀山城（広島市）を攻略。

大永五年（一五二五）

大内　毛利元就が大内に帰参し勢力回復。豊前少弐資元（すけもと）と交戦し、尼子と備後国山名の戦いが続く中、義興は石見を奪還。備後国は大内軍率いる陶興房と尼子氏の争奪戦となる。

大永五年（一五二五）―大永八年（一五二八）

十六代当主正房　当主交代不詳（生一四七八年―没一五六一年）四十七歳。当主の座十六年で勢力衰退。

十七代当主長房　**正房**の子**長房**二十九歳（生一五〇六年―没一五八八年）に当主の座を譲り、長房体制の盤石化で大内の傘下入り。大内家中での座を確保に、十五代当主大内義興の娘を長房の室に迎え、**大内家との姻戚**を背景に豊前の有力者として勢力のを回復に努める。これは大内氏にとっても北九州で対峙する少弐氏への有力な圧迫となることを期待。

享禄元年（一五二八）**城井宇都宮家は大内方**

十二月　大内　大内義興（よしおき）（生一四七七年）歿す。子義隆が十六代当主として北九州に進出し大友領を脅かす。*18　**豊前**・筑前の支配を継承。

享禄三年（一五三〇）第二十代当主大友義鑑の嫡男義鎮が誕生。母は大内義興の娘で大内義長とは異母兄弟。

少弐・大内　大内義隆の家臣杉興連・陶興房が少弐を攻め、肥前松浦を従属させ、北部九州の沿岸部を平定し大陸貿易の利権を掌握した。少弐家の家臣龍造寺家兼の抗戦で筑前守護代杉興連・北九州の諸将は肥前田手畷（たてなわて）の戦い（佐賀県神埼市）で大敗。龍造寺が台頭。

享禄四年（一五三一）秋月種時が死去し、嫡男文種十九歳が十五当主となる。*32

天文元年（一五三二）**城井宇都宮家は大内方**

七月**十六代当主正房**　**先代正房**は一族の佐田朝景と共に大内方で筑前・肥前まで転戦。玖珠で大友方と交戦。

十月　少弐　少弐資元が大内と和議。

十一月大友・大内　少弐資元と大友義鑑が挙兵し義鑑は宇佐郡妙見岳城（大分県宇佐郡）を攻めた。大内

義興は二万三千を率い豊前に上陸。大友・少弐連合が侵攻し大内義隆は長府に布陣。

天文二年（一五三三）　大内が大友方筑前栫示岳城（福岡市西区）、立花山城を落城。*18 大友は大内と和議。陶興房が少弐資元を肥前多久城に追い詰め、資元は自害。

天文三年（一五三四）　大内義隆が重臣陶興房・杉重信・佐田朝景ら三千騎で大友攻め、豊前宇佐郡から勢場ヶ原（杵築市山香）に進行するも、大村山に本陣の大友軍二千八百騎との対戦となり、両者夫々三百騎前後の戦死で大内は退却*18　大内は肥後菊池と連携し大友を攻める。

四月勢場ヶ原の戦い

九州探題

天文四年（一五三五）　探題渋川義長は少弐との戦いで衰退し大内に支援要請。少弐は渋川を攻め滅亡させた。大内の調略の下、龍造寺家兼を少弐から離反させ、家兼が少弐資元に大内との和議を進言、この謀略で少弐の家督は全て没収され、龍造寺は大内の庇護を受けて独立した。

天文五年（一五三六）　**城井宇都宮家は大内方**

大内

義隆二十九歳、大宰大弐に叙任、北九州攻略の大義名分を得て龍造寺と組み、陶興房が**少弐資元を攻撃し滅ぼし**、資元の子冬尚は蓮池城に落ち延び、北九州、筑前を平定。大友の博多支配後退。龍造寺胤栄が肥前守護代に。*18 秋月は大内家の家臣に。*32 先代**正房**は大内方。豊前上毛郡の段銭奉行（朝廷・幕府の司祭・造営の費用に充てる田畑の段数に応じて徴収する金銭）を務めた。

十六代当主正房

十七代当主長房

天文六年（一五三七）　尼子　大内

長房（生一五〇六年―没一五八八年）に子**貞房**（後に**鎮房**）が誕生。豊臣秀吉誕生。

尼子経久は孫・晴久に家督相続。晴久は播磨へ勢力拡大図るも大内が阻止、撤収。*31 十二代将軍義晴から入幕要請あり、上洛の試みは尼子に阻止され断念。

天文七年（一五三八）　大内は将軍義晴の仲介で大友義鑑と和睦。

天文九年（一五四〇）　尼子三万が大内方毛利元就の本拠吉田郡山城攻め、大内は陶隆房を総大将に援軍。*31

天文十年（一五四一）　大内義隆により秋月文種は幕臣に推挙された。

天文十一年（一五四二）　大内義隆軍二万が尼子の居城月山富田城（島根県安来市）を攻撃。一年半の持久戦で大内支配の国人衆を寝返らせ大内軍は敗走。*31 大内義隆の養嗣子晴持が敗走死。

天文十二年（一五四三）ポルトガル船が種子島に漂着して鉄砲を伝来。
大友義鑑は肥後守護職を得て豊後・肥後・筑後の三国支配を確立。*18*19
天文十三年（一五四四）大内義隆は姉婿大友義鑑の次男晴英を猶子とした。
少弐の重臣らは龍造寺の主君に対する下克上に憤慨し調略により龍造寺一族は衰退。
天文十七年（一五四八）大内・龍造寺が同盟締結、胤信は偏諱し隆信と名乗り、大内を後ろ盾に臣下を纏る。
秋月種実が文種の次男として生まれる。*32
天文十八年（一五四九）葡国王派遣のキリスト教の宣教師フランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝える。
〈大内内紛・毛利台頭、大友・島津で内紛平定、北九州は大友対大内覇権争い〉
天文十九年（一五五〇）ザビエルが山口で義隆に謁見。義隆の仏教の保護を非難し布教許可を得られず。
二月二階崩れの変　大友義鑑が長男義鎮（宗麟）の廃嫡を謀り異母弟塩市丸に家督を継がそうとして内紛で義鑑が横死、義鎮が二十一代当主となる。*1*15*18*19*32
天文二十年（一五五一）大友はフランシスコ・ザビエルを府内に招き、布教許可を与えた。
大内はザビエルに再謁見。義隆を貴人として認め、献上品を貢ぎ、布教が許可された。
六月　毛利元就が広島一帯を占拠。*16*18
大内は肥前・豊前・筑前を完全に支配。肥前は大友・大内の争奪の場となった。*18
八月　大寧寺の変
大内義隆の家臣陶隆房（後の晴賢）の謀叛で自害。義隆、享年四十五。
大内家は平安時代から防長の名家。九州の少弐家から博多の海外交易、通商航路の要衝赤間関、門司の支配権を奪い、貿易で財力を得て軍備拡大。義隆の放蕩で政務は疎か、家臣間の内部抗争へ発展。義隆に子がなく姉婿大友義鑑の次男晴英を猶子としており、陶隆房は晴英（後の大内義長）を新当主み擁立し傀儡政権を樹立。毛利は主君の仇討ちを御旗の下、隆房・義長を下し大内家は滅亡。中国・北九州の大内支配が崩壊。*1*15*18　十五代当主秋月文種が大友に反旗。大友一万の兵が秋月の古処山城（嘉麻市・朝倉市の市境）を攻撃。*33
天文二十一年（一五五二）尼子晴久が山陽山陰八カ国の守護、幕府の相伴衆に任ぜられた。
三月　大内　陶隆房は大友晴英（後の大内義長）を新当主に迎え、隆房は晴英から偏諱し晴賢に*32

大友は大内の対立が解消、北九州の大内方大名の服属、周防・長門への影響力維持、博多の貿易利益の貢献大。晴英（後の大内義長）に高橋鑑種が奉公人として赴く。

十七代当主長房

大友の城井宇都宮家への圧迫が増した。

天文二十二年（一五五三）大内家重臣が府内入りし大内家家督を大友晴英に相続。義長と改名。*18

大友　義鎮の家臣団内でキリスト教との宗教対立が起こり、一万田鑑相の謀反、三年後の弘治二年（一五五六）の小原鑑元の謀反の引き金となった。

天文二十三年（一五五四）大友義鎮は肥前国守護に補任された。将軍への貢・献金が功を奏す。*18

七月　大友　義鎮は叔父肥後菊池義武を出家させ護送中に殺害し反対勢力を一掃。*18

義鎮は豊後・肥後の九州以北の豊前・筑前支配に乗り出した。

弘治元年（一五五五）

九月　厳島の合戦

十月　毛利　毛利元就は村上水軍を味方につけ大内水軍を撃破、陶晴賢は逃亡し途中で自害。*16

国人　経済戦略地北部九州の放棄はせず。元就は防府へ出陣の約二年間岩国永興寺に滞留。

九州北部を戦場とした支配抗争は、地方の群少勢力は大きな被叡として受け入れず従属するものは少なく、大名家から離反。

大友　大内方の豊前豪族に大内義長支援を要請、**城井・野仲**は動かず。大友義鎮は豊前に進攻。

城井房統　**正房**の弟**房統**（ふさむね）の護る**龍王城**（宇佐市安心院）を大友軍が攻略。宇佐三十六人衆も屈服。

野仲　津民庄の長岩城を大友軍が攻略。

彦山　大友軍は秋月・仁保勢を追い、彦山の衆徒を制圧して豊前一円を掌握した。

弘治二年（一五五六）―天正六年（一五七八）

十五代当主長房　この年以降大友方につき城井谷の要害を固め鎌倉以来の伝統の地を守っていた。

十六代当主長房　この頃当主交代不詳、五十歳（生一五〇六年―没一五八八年）三十一年間当主の座。

十七代当主鎮房　大友は大内の当主に晴英を送り込み、その後大内が毛利により滅亡したが、**北部九州は大友が覇権**を掌握し**城井宇都宮家は大友氏の傘下**に入る。これを機会に当主の座を子**鎮房**二十歳（生一五三六年―没一五八八年）に譲る。長房が大内の娘を娶り姻戚関係を結び、大内を背後に勢力を維持。鎮房も大友義鑑の娘を室とし姻戚関係を結んだ。

大友義鎮から偏諱を賜り貞房から鎮房に改名。鎮房は怪力無双で弓の名手。

〈大内氏滅亡、毛利が平定・九州に復権進攻、大友は豊前筑前平定で進攻、秋月没落〉

四月　大友　義鎮は一万五千の軍勢で豊前を征伐、宇佐下毛の諸城は、たちまち降伏した。

野仲　長岩城野仲重兼は籠城して敢然と迎え討ったが降伏し、その後大友家に仕えた。義鎮は武勇を称え「鎮」の一字を与え、野仲鎮兼と称した。

中間　長岩城の戦いに山国郷より戦士が野仲支援、「城をも護る者中摩、守実、宇曽、吉野、寺小野の勇士五百余騎……」、他山国郷から部落名を名乗った多数参戦。日田口にも一ッ戸城主与市が当る。（九州軍記）長岩城の落城で一ッ戸城は無血開城。*20

弘治三年（一五五七）

三月　毛利　元就は義長を高嶺城、長門勝山城、更に長福院に攻め毛利軍の包囲で自害。**大内滅亡。**

毛利は名実共に安芸・備後・周防・長門・石見の戦国大名となる。*16

大友　大内家滅亡後、大内義長の奉公人高橋鑑種は豊後に戻る。大友義鎮は豊前・筑前支配に乗り出す。*18　秋月は大内家が滅んだあと一時大友と仲たがいした。

七月　毛利・秋月　元就の豊前・筑前を与えるとの甘言に呼応し、秋月文種は居城古処山城で挙兵し大友に対峙する。大友は立花道雪、臼杵鑑速二万の兵で攻め、文種は二千の兵で古処山城で戦うも文種・嫡男晴種も討死。大友毛利間に、元就は筑前に干渉しない密約あり。

弘治三年（一五五七）

七月　秋月　十三歳の種実と三人の遺児は、家臣大橋豊後守に護られて毛利へ逃げ庇護された。*33

十二歳の種実と弟二人は家臣に護られて古処山城落城寸前に脱出し、周防山口の元就に庇護を求め落ち延びた。*35

七月　秋月　毛利が北九州に進出。文種は毛利と結び、大友を離反。元就の北九州への進出に大友義鎮は毛利との対立を決意。毛利と内通の秋月文種を滅ぼし北九州の旧大内領を所領。

大友　大友軍は高橋鑑種（あきたね）の大殊勲で筑前秋月家を倒した。高橋鑑種は戦功により筑前三笠郡二千町の大禄を得て大宰府の宝満城督となり、府の北側に岩屋城を築き、後に筑前国守護代に。

毛利　毛利元就は、安芸から防長を手中にし、更には石見銀山方面へ侵攻を始めた。*31

野仲　馬台城（中津市耶馬渓町）攻めで城主豊田対馬守を滅す。野仲は周防大内家に属す。

野仲　大内義隆が討たれ大友軍の豊前侵攻で大内方野仲重兼は大友に臣従。*32

毛利　九州に進攻、門司城を落城。長野は毛利傘下に。毛利と大友は豊前・筑前で激戦交す。

永禄元年（一五五八）　門司城争奪の戦いが毛利・大友で永禄元年から五年間四次に渡り繰り広げられた。

第一次門司城の戦い　石見国に進軍の毛利元就が次男小早川隆景に命じ大友方門司城を落城、九州進出果す。

永禄二年（一五五九）　秋月の旧臣深江美濃守が毛利から帰還した種実（父文種の次男）を居城に迎え、古処山城を占拠していた大友軍を破り、旧領地を奪還した。

二月　少弐　十七代当主少弐冬尚が勢福寺城を龍造寺隆信に攻められ自害。少弐家は滅亡。*32

永禄二年（一五五九）　四月、大友宗麟の軍勢一万五千は宇佐・下毛の征伐に、諸城は忽ちに降伏。進軍は彦山、**毛谷村、山国郷、津民庄、野仲郷に及びキリシタン宗兵の行軍で神社・寺社に兵火を及ぼし彦山も兵火**に会う。大友の行軍で山国郷守実の大歳祖神社に兵火が及び本殿を焼失（永禄年間）、白地亀岡八幡神社で伝来の古文書類が焼失した。*20

大友は幕府への献金で義鎮は豊前・筑前・筑後の守護職を得た。*18*33

第二次門司城の戦い　大友は筑後の花尾、豊前の門司・香春岳と城井宇都宮一族西郷の不動岳の各城を攻め、大友勢の田原親宏は八月に不動岳、九月に大友数万の軍勢で門司城奪還を試みるも、隆景の援軍は三手攻撃（正面は門司・小倉の二方面、後方の朽網方面）で大友は敗退。退却の大友軍を隆景率いる村上水軍は朽網に先廻りして攻撃し大打撃を与えた。*31

毛利　大友は九州探題職と大内家の家督を与えるとの将軍の御書を得た。*18*33

元就の矛先は、旧大内家の権利・北九州の在野勢力の支援を大義名分に、赤間関に対峙する門司城を大軍で攻撃し占領した。

十七代当主長房

永禄三年（一五六〇）　**長房**五十三歳が子**鎮房**を伴い上洛し、足利義輝に拝謁した。

桶狭間の戦い　今川義元と織田信長の戦い、僅かの手勢で信長が勝利、鉄砲の近代武器の威力を示す。

大友　大友義鎮は、足利一族の扱いに任ぜられ、六カ国（豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・

肥後）の大名となり、九州の覇者となった。*18

大友　義鎮が左衛門督（さあえもんのかみ）に任官、大友全盛期となる。

毛利　尼子晴久が急死し、毛利との和睦を将軍足利輝に仲介を依頼。*31

永禄四年（一五六一）　宇佐八幡とともに山国郷では大友義鎮により兵火*20

第三次門司城の戦い　大友方一万五千騎、毛利一万八千騎で大友方は小倉を本陣に香春岳城、豊前箕島、花尾城で合戦後、大里、和布刈で主戦、十月に大友は門司城の包囲を解き撤退。十一月、大友の退却軍は先回りの小早川水軍に京都郡で追撃され大敗。高橋鑑種も出陣するも豊前松山城、馬ヶ岳城、香春岳城を毛利が攻略。

十六代当主正房

永禄五年（一五六二）　大友は将軍足利義輝に献金、毛利の侵略封じを嘆願。尼子と連携し毛利狭窄を画策したが尼子晴久が急死し、宗麟は毛利との和睦を将軍義輝に仲介を依頼。*31　元就はこれを破棄し出雲に侵攻した。*14

第四次門司城の戦い　毛利の出雲出兵の隙を突き、大友は松山城を攻略。門司城は攻め落とせず。義鎮は出家して宗麟と号す。大友方の高橋鑑種が大友に翻意し安楽寺天満宮留守職に小鳥居氏を任じるなど反大友の動き。毛利隆元の家臣山田満重の勧誘で毛利に通じる。

永禄五年（一五六三）　高橋鑑種が毛利方に寝返る。宗麟が兄鑑相の妻を横恋慕した事の遺恨、対毛利調略の最中に大友と毛利の和睦による面汚し、毛利の調略による。*20　鑑種は毛利隆元に大内の旧臣杉隆哉の香春岳城を求めたが毛利方は杉の大友への寝返りを恐れ受入ず。毛利輝元の父隆元四十歳が死亡、十歳で輝元が毛利の家督を継ぐ。

永禄七年（一五六四）　将軍足利義輝の仲介で毛利は北九州の占領地の大友への返還に合意。対尼子・大友の兵力二分化の回避のため。この合意は果されず北九州の在野国人は反大友に。*31

永禄八年（一五六五）　大友は毛利が周防に撤退すると北九州を制圧。長野氏は大友の支配下となる。

永禄九年（一五六六）　**毛利中国平定**。元就は尼子義久の本城・月山富田城を兵糧攻め、尼子は滅亡。

永禄十年（一五六七）　豪族小早川・吉川と姻を結び国内の地歩を固めた。*14

高橋鑑種に秋月・龍造寺と反旗の動き、宗麟は「忠節無比」の鑑種を信じ対応せず。

毛利が再び九州へ進攻。豊前・筑前の国人と内通し、秋月種実が古処山城で挙兵。
大友重臣の筑前宝満城、岩屋城の城督高橋鑑種も同調、筑紫惟門（ちくしこれかど）・宗像氏貞・原田了栄も挙兵、筑後の筑紫広門も大友を離反。肥前龍造寺隆信も大友に反旗。
宗麟は筑前、肥前の高橋・秋月・龍造寺連合の討伐軍二万を戸次道雪に率いさせ派遣、秋月の支城巴城、休松城を落城した。古処山城は堅固な護りで、宝満城を封じつつも秋月攻め膠着状態。その後立花山城（福岡県新宮町・久山町・福岡市東区）、岩屋城を攻略、筑紫広門が降伏。毛利の九州侵攻の報に大友方国人は参陣を解いて自領に帰還。
大友軍は休松の陣から撤退を開始。秋月種実は一万二千をで大友を攻撃するも被害大。種実は二千で大友軍に夜襲、有力武将を含む四百の死者の成果。大友軍は筑後山隈城に退くも、大友軍は精鋭（臼杵鑑速、吉弘鑑理）を亡し、戸次道雪の弟は討死。
大友の拠点立花山城城主立花鑑載が元就の調略に乗り大友へ反旗。
大友の重臣吉弘鎮理の子の高橋紹運の長男立花宗茂が誕生。
宗麟の命で高橋紹運（じょううん）（初名吉弘鎮理（よしひろしげたね）→高橋鎮種（しげたね）→法名紹運）は筑後高橋家を継ぐ。

十一月十八日

永禄十一年（一五六八）立花山城城主立花鑑載（あきとし）が大友家に反旗。立花山城が大友軍により陥落。鑑載が自害。
永禄十二年（一五六九）秋月は毛利に援軍を要請し、元就は百隻以上の船団で攻勢、大友軍は劣勢に。*31

四月　毛利　立花山城を大友方より奪還の為、吉川元春、小早川隆景四万が北九州に進攻、大友方の城を攻略し、国人の多くが反大友に。

大友　大友軍は肥前龍造寺隆信の勢力拡大阻止のため進軍。龍造寺は孤立。和議も拒絶され、大友は高良山の吉見岳城に本陣を敷き龍造寺城を攻撃、城下は兵火となった。この間、毛利は大友方立花山城を落城。大友軍は龍造寺と和議を結び立花山城奪還に転換した。

毛利・大友　戸次道雪率いる大友軍三万五千と毛利軍四万の戦いは大友軍が優勢ながら拮抗し展開。

五月多々良川の戦い　立花山城を大友と毛利攻め合う戦いが多々良川で小早川隆景の防衛線を大友方の戸次鑑連が突破し、毛利方は立花山城に引き上げ膠着状態が続く。

八月　秋月　彦山と絆の深かった秋月種実は大友に降伏した。

大友・龍造寺　再度肥前に侵攻。龍造寺隆信に大友親貞が討たれ大敗、隆信と不利な条件で和睦。

毛利・大友

戦局打開の為、宗麟は重臣吉岡長増の献策「毛利本国に逆進攻する策」を容れ、大内の残党大内輝弘に数千の兵を与え周防へ進攻させ、毛利の拠点高嶺城を攻め、尼子の残党山中鹿之助と手を結び尼子勝久を隠岐より出雲に侵攻させ、毛利本国を狭撃、旧家再興戦略で毛利の領内を撹乱した。九州に侵攻の毛利勢は本国に引き揚げ、九州の三前後は大友の覇権の地となり、九州探題に任じられた。

毛利

美作・備後・周防・出雲の内乱で元就は小早川・吉川に立花山城を放棄して本国への撤収を命じ九州から事実上撤退した。*31 毛利は本国復帰で大内輝弘を討死、領内は安泰。毛利撤退で後ろ盾を失った高橋鑑種は大友方に降るも家督を没収され小倉城に移封。筑後高橋家は吉弘鎮理（後の紹運）が名跡を引継ぐ。

元亀元年（一五七〇）　永禄十三年（一五七〇）四月二十三日改元。立花山城が開城。

今山の戦い　龍造寺の重臣鍋島直茂が大友親貞の本陣を夜襲し撃破。家中を立て直す*31

〈南九州は島津、北部九州は大友が掌握・大友が島津に大敗・大友離れ〉

元亀二年（一五七一）

十八代当主鎮房　長男**朝房**誕生。

大友　戸次道雪、立花家の名跡を継承し立花山城城主となる。筑前での大友方主将十年の戦功による。以降、戸次を自称するが事実上は立花道雪。

六月　毛利元就死去七十五歳。*14*16　輝元は毛利両川の体制（元就により毛利の血統下で軍事、政治を行う）の下で重臣の補佐をうけ親政を開始する。輝元十八歳。*32

島津　島津貴久病死。好機とし肝付・伊東・相良の三軍は島津に侵攻。*31

元亀三年（一五七二）　島津へ侵攻した伊東軍総大将が戦死し伊東家は崩壊、肝付家は降伏。*31

元亀四年（一五七三）　織田信長により足利義昭が京都を追放され、室町幕府は名実ともに滅亡した。

天正二年（一五七四）　島津家は肝付家の降伏で薩摩・大隅・日向に勢力拡大し南九州の覇権を掌握。*31

天正三年（一五七五）　大友宗麟は戸次家の家督を継いでいた（立花道雪の甥鎮連の子）統連に家督を統連に譲れの命を道雪は拒否。道雪は一人娘闇千代（ぎんちよ）に家督を相続し立花城城主とした。その後、高橋紹運に願い長男の統虎（後の立花宗茂）を養子に貰い夫婦にした。

天正四年（一五七六）信長に追放された将軍足利義昭が毛利輝元の元に、備後鞆に都落ち。毛利は織田との親善関係を義昭が主導する反織田に転換した。毛利は北部九州の失地回復を放棄。

大友は筑前支配を磐石化で、筑前の軍権と立花山城を立花道雪に、高橋鎮種（後の紹運）に岩屋城・宝満城を継がせ、宗麟は長男の義統に家督を相続し、臼杵へ隠居する。

信長に敵対の大坂石山本願寺の要請で派兵し木津川の戦いで勝利。*16

七月　毛利

天正五年（一五七七）毛利輝元は吉田から出陣、秀吉軍と対峙*16

大友

島津義久が日向侵攻すると、宗麟も大軍を率い出陣。

天正六年（一五七八）大友宗麟は宣教師フランシスコ・カブラルから洗礼、キリスト教国建国で日向へ進攻。

十一月**耳川の戦い**

大友宗麟と島津義久が九州覇権を争う戦い日向高城川原（宮崎県木城町）で戦い大友が大敗。**十八代当主鎮房も大友方で参陣。**豊筑の諸豪族は大友家からの離反が始まる。

彦山

島津は日向を制圧、肥後に進攻。

座主舜有（しゅんゆう）は秋月種実の許へ政所坊連長（まんどころぼうれんちょう）、伊良原（いらはら）因幡守を人質に出し、種実は弟種冬、三男元種を小倉城主高橋鑑種に養子に出し、舜有は高橋元種と行動を共にする。*30

秋月種実は大友から離反し龍造寺隆信・筑紫広門と手を結ぶ。大宰府・博多への進攻を図るも大友方立花山城の立花道雪により阻まれる。高橋鑑種は反大友で挙兵。

天正七年（一五七九）長岩城主野仲鎮兼も大友を離反し挙兵。下毛郡の大半を手中に収めた。*20　大畑城城主加来統直（中津市加来）を七年間、四十八回も城攻したが敗退。

彦山

座主舜有は、筑前益富城城主秋月種実と養子縁組の盟約（種実の息子を座主の養子に迎え、座主からは二人の人質を秋月家に出す）を結ぶ。大友宗麟は弟を養子に差し出すと申し込むも「座主は始祖伝来の血統の者に限られている」と断られる。座主舜有の娘と種実の嫡男種長が結婚。

反大友

筑後の蒲池・草野・黒木が大友離反。大友の当主義統と宗麟の二頭政治の歪で衰退へ。

毛利

毛利方の宇喜多が織田に寝返り形勢逆転。本願寺も降伏。*16

豊前簑島城城主杉重良が毛利に反旗し大友方に寝返り、秋月・高橋・長野の連王軍と戦うも同年三月高橋鑑種に討ち取られた。四月、高橋鑑種病死、京年五十一。秋月種

実は弟・種冬（高橋種冬）を小倉城主に、次弟種信（長野種信）を豊前馬ヶ岳城主に、息子三男元種を香春岳城主に配置し、中津街道、秋月街道の守備を固め、一族で大友と対峙する体制を確立した。

天正九年（一五八一）　立花道雪には嫡男が無く、高橋紹運の子統虎（後の立花宗茂）を養子とし、娘闇千代（ぎんちょ）と結婚させ、家督を相続していた闇千代の家督を統虎に譲るも家内別居で子息なし。

七月嘉麻穂波の戦い　立花道雪・高橋紹運の同志が秋月との戦いに出陣、宗茂は初陣で相手の勇将堀江備前の左腕に鏑矢を命中。その後、組みかかり角力得意の宗茂は圧倒し討ち取る。

彦山全山焼き打ち　大友義統は、座主舜有の娘と種実の嫡男種長との結婚に怒り二万の軍勢で彦山攻め。秋月は龍造寺と組み彦山の日田口からの大友の進軍を阻止。大友勢は彦山を包囲し全山焼き打ちした*30（「大友家文書録」）。軍勢の一部は山国郷を通り彦山を攻め、堂塔伽藍を灰にした。*20　中間家は彦山霊仙寺の名主。（「大友家文書録」）。*30*20

十一月六日　大友　七月と同じ戦い。朽網鑑康が秋月との原鶴の戦いで宗茂は救援に出陣したが、朽網が無事撤退との報で自軍の撤退中に秋月の追撃をうけ、激戦（潤野原の戦い・八木山の戦い）となり両軍は多数の死者を出した。

山国　大友勢は道筋の神社寺社仏閣を焼き払い、仏像・神像を道路補修に使用し山国郷の民は唖然と見送ったであろう。

天正十年（一五八二）　大友宗麟による兵火で宇佐神宮も焼失。*15*20

四月十六日　立花　立花道雪の本隊一千が岩戸の戦いで秋月・原田・宗像連合軍二千に包囲され、宗茂が伏兵五百を率い内三百の鉄砲隊で襲撃、残り二百を薦野増時（後の小倉城代立花三河守増時）が指揮して、偽の大友援軍を醸し敵の包囲を解いた。更に宗茂は一千騎を率い、原田の早良城を落城した。

〈織田信長天下布武成らず・秀吉中国大返し〉

毛利輝元の反織田への転換で、秀吉は備中高松城を水攻め。信長に援軍要請。

六月二日本能寺の変　明智光秀の謀叛で織田信長が討たれる。*4　光秀の追討の為、秀吉は備中高松で毛利と講和。毛利領地の割譲は先送りし、中国大返しで大坂へ戻る。*16

同十三日山崎の戦い　秀吉は明智光秀に勝利。*4
天正十一年（一五八三）秀吉は石山本願寺跡に大坂城を築城。
三月　立花は宗像氏貞の居城許斐山（このみやま）城、龍徳城を落城させた。
九月　毛利は大坂に小早川・吉川の人質送る。国境確定し安芸・備後・周防・長門・出雲・石見・隠岐＋備中・伯耆の半国を所領。秀吉の支配下に入る。*16
天正十二年（一五八四）八月、立花道雪・紹運は大友の筑後奪回に参陣（宗茂は立花山城に留守）。秋月種実の軍勢八千が立花山城を攻めるも宗茂が夜襲・火計で撃破。龍造寺の砦、飯盛城を襲撃。道雪は龍造寺・島津を破り筑後の大半を奪回した。

沖田畷の戦い

島津義久と龍造寺隆信の戦いで隆信が戦死。秋月種実は、台頭の島津義久に従属、大友方（立花）と島津の龍造寺挟撃作戦を展開する前に、種実は島津・龍造寺の和睦を成立させ大友に反抗。島津軍の総力を豊後大友討伐に向け秋月領国内への影響を回避。大友の衰退で秋月と結び大友の勢力を豊前から排除を画策。馬ヶ岳城城主長野と結び下毛郡に侵攻。宇都宮一族の佐田・西郷らは大友に留まり領土の拡大は頓挫した。大友は豊前に進攻しようとしたが秋月の反撃で敗退した。

十八代当主鎮房

天正十三年（一五八五）七月　秀吉は関白に叙任。総勢十万総大将弟秀長で四国攻め。毛利輝元・小早川隆景に参戦要請。

秋月　大友・島津の戦いの間に、秋月種実は大友領を領有し、筑前・豊前・筑後北部、筑前六郡、筑後四郡、豊前一郡の三十六万石を所領し朝倉～秋月街道～小倉一帯を配下に二十四城を配置、鎌倉時代以降、四百年の家系を護り繁栄期に入る。しかし博多への進出は立花道雪・高橋紹運により阻まれ、高橋鎮種の居城岩屋城を攻めた。*35

二月　島津　毛利の庇護下の足利義昭は島津義久を九州の「太守」に任じ、自身の帰洛時の援助と、大友攻めを命じ（島津による毛利に敵対する大友への牽制）、豊前・豊後・筑前への侵攻を開始した。既に日向の伊東、肥後の相良・阿蘇、肥前の有馬・龍造寺を傘下に。大友の家臣立花道雪が病死。筑後の態勢が不安定となる。

九月十一日　立花　秀吉は朝廷命で島津と大友に停戦命令を出す。大友受入れ、島津は家臣を秀吉に派遣。

十月

〈島津九州覇権へ・中央権力の介入、秀吉の九州征伐の引き金〉

天正十四年（一五八六）

四月五日　大友　宗麟は大坂城の秀吉に謁見し、豊臣傘下に入ることを条件に島津征伐を嘆願した。*31

六月　秀吉　豊臣側は肥後ルートを主とし、豊前ルートの二方向南下策を策定。

六月十八日　島津　義久、鹿児島を出発。東には島津義久・義弘・家久率いる三万を配置し、西は島津忠長を大将に二万の軍勢＋諸勢力計五万の軍勢。*31　筑前に侵攻開始。

天正十四年（一五八六）

七月二日　島津　義久も出陣、八代に本陣を置き筑前攻めの指揮を執った。島津忠長・伊集院忠棟の先陣とする島津軍が筑紫広門居城の肥前勝尾城（鳥栖市）を攻める。

七月六日　島津　高良山（久留米市）に本陣を敷く。肥前勝尾城・支城鷹取城（鳥栖市）を攻略。勝尾城を開城、城主筑紫広門を討ち取る。

七月十日　秀吉　討伐軍の派兵を決定。国分令（全九州の国領仲裁）の執行を宗麟・輝元に命令。四国諸国の大名（仙石秀久、長宗我部元親）に九州進軍を命令。

七月十二日　島津　本陣を高良山から更に北に前進し筑前天拝山（筑紫野市）に移した。

七月十三日　島津　島津忠長三万が高橋紹運七百の護る岩屋城（太宰府市）を攻勢し落城、城兵全員討死、島津一千名以上の死者、紹運も自害。*31　島津忠長二万で大友方の筑後の筑紫広門を攻撃。秋月の仲介で開城。高橋紹運の子統増（後の直次）護る宝満山城も落城。

八月六日　立花　高橋紹運の長男十九歳立花宗茂は立花山城で島津に抗戦、遊撃・奇襲で成功。

八月　秀吉　四月に吉田郡山城毛利輝元に九州征伐の先導役を命じていた輝元に九州出陣を命令。

八月六日　島津　大友宗麟親子・立花宗茂に黒田孝高・宮木豊盛の豊前出陣を伝えた。

八月二十日　立花　立花山城は護り堅く攻めあぐね。宗茂は降伏勧告に応じず。

八月二十四日島津　宗茂は島津方秋月種長二千を奇襲、四百を死傷さす。

島津は、立花宗茂護る立花山城を攻め降伏勧告するも、毛利軍が長門国赤間関（下関市）まで進軍したとの報で、この戦局の報に島津軍は立花山城の包囲を解き南方三里半先の高鳥居城（福岡県糟屋郡須恵町）への撤退を選択。島津軍は転戦で戦力を消耗。

宗茂は追撃し火計で高鳥居城を攻略し、岩屋・宝満の両城を奪還した。

八月二十五日　立花　毛利先遣軍三千は門司城から島津方高橋元種の支城小倉城攻略で進軍したが、秋月種

八月二十六日　実の攻撃で引き返す。小早川隆景が伊予から吉川元春が出雲から出陣。※5

小早川隆景援軍が北九州に上陸。島津軍は筑前撤収へ。※31　立花宗茂と毛利先遣軍

は島津軍を追い、岩屋城・宝満山城を奪還。秋月は宗茂に破れ後退、龍造寺家も島津

を離反して豊臣へ従属、筑前・筑後は豊臣・大友軍により制圧された。※31

九月九日　秀吉　朝廷より豊臣姓を賜る。

九月　秋月　家臣恵利暢堯は豊臣勢力圧倒を読み降伏を進言し、種実は切腹させた。

九月　毛利　毛利分家岩国横山城城代桂能登守元重の請願で錦帯橋の再普請を評定決定。

一味斎が普請奉行（元就公時代に同奉行を任じた）※3

九月　四国援軍　四国の十河・長宗我部が豊後に出陣し府内に入る。

九月中旬　毛利　花尾城（北九州市八幡西区）・広津城（福岡県築上郡吉富町）・時枝城（宇佐市）、宇

佐城、龍ヶ岳城（福岡県宮若市）を帰服させた。

十月　初旬　毛利　輝元は、軍監黒田孝高、叔父の吉川元春、小早川隆景と共に九州入り。孝高は豊前・

筑前の島津方武将に寝返りの調略を図る。輝元は高橋元種の小倉城、賀来氏の豊前宇

留津城（築上郡築上町）を攻撃、小倉城兵は香春岳城（田川郡香春町）へ逃亡し陥落。

豊前馬ヶ岳城（行橋市）、豊前浅川城（北九州市八幡西区）、筑前剣ヶ岳城が陥落。

立花　小倉の城は、立花山城城主で若干十八歳の立花左近将監宗茂の預かりとなり、宗茂の

家老立花三河守増時が城代として入城した。

十月　毛利　輝元指揮で元春・隆景も加わり小倉城攻め開城、城兵は本城の香春岳城に逃亡、隠居

の身の元春は出陣を辞退したが秀吉の要請で久方の合戦。

豊前馬ヶ岳城、豊前浅川城、筑前剣ヶ岳城が落城。

天正十四年（一五八六）

十月　島津　豊前、筑前、筑後の敗退で大友本陣の豊後を集中して攻撃する方針転換。島津義久の

弟島津義弘を大将、三万で肥後阿蘇から豊後に侵攻、義弘は津賀牟礼城（竹田市）を

十一月四日　大友

陥落、小松尾城（竹田市）・一万田城（豊後大野市）が従軍、岡城（竹田市）は不落。義久の命で弟島津家久は一万の兵で、松尾城（豊後大野市）、小牧城（同）を陥落。大友の有力な家臣佐伯惟定は、栂牟礼城（佐伯市）と多数の支城を築き、海上防備も尽くして島津の攻勢を止めた。

十一月　島津

島津家久は豊後鶴賀城（大分市）を攻め、城主で宗麟の重臣利光宗魚は肥後出陣の途上で引き返した。宗魚は島津家久本陣を夜襲。

十一月　毛利

元春は島津方の宮山城（北九州市）を攻略し、隆景と共に高橋元種の支城豊前松山城（苅田町）を攻略。毛利は豊前宇留津城（築上郡築上町）陥落。高橋元種の支城豊前障子岳城（京都郡京都町）を攻撃した。　吉川元春は小倉城で病死。五十七歳。※32

十二月　毛利

高橋元種の本城、豊前香春岳城を二十日間猛攻し、遂に元種は降伏した。

毛利

秀吉方は、豊前のほぼ全地域を平定した。

山国

大友対島津の戦では、中間家は大友の傘下に入り、鎌田将監と大将陣山に立て籠もり、島津を破ると彦山を攻め僧兵と戦った。彦山は堂、塔、伽藍を灰に僧兵三千八百と共に滅び彦山の栄華は終わる。

十二月六日　島津

家久は鶴賀城を再攻撃、宗魚は府内の大友義統に援軍を仰ぐも戦死。府内城には大友義統のもと、四国からの援軍六千。島津家久・義弘からの挟撃を恐れ、四国援軍は家久軍を戸次川（大野川）で食い止める為に出陣した。

十二月戸次川の戦い

島津家久は本陣を鶴賀城から坂原山に移し一万八千の軍勢。四国援軍の高松城城主軍監仙石秀久は、長宗我部元親の制止も聞かず、十河存保と共に渡河作戦を決行し島津の伏兵により四国勢二千、長宗我部元親の嫡子信親、十河存保の武将を失う大敗。

十二月十三日島津

府内城を陥落。宗麟の居城丹生島城（臼杵市）を攻めポルトガル製の砲で防御反撃された。島津軍は北上し杵築城を攻めたが失敗。豊後南部で大友の家臣佐伯惟定が諸城を奪還。義弘は豊後朽網（くさみ）城（竹田市）に後退し越年、家久は府内城、義久は日向塩見城（日向市）で越年。

〈秀吉九州征伐・豊臣政権樹立〉

十二月一日　秀吉　諸国に対し、天正十五年三月「自ら島津征伐に当る。東海から山陰・畿内三十七ヶ国で二十万の兵の召集」を命じた。軍勢三十万・一年分の兵糧米・、軍馬二万の調達担当：小西隆佐他、兵糧奉行・出納・移送担当：石田三成・大谷吉継他、船舶徴発、兵糧十万石の赤間関への輸送担当：小西隆佐。

十二月　秀吉　太政大臣に就任し、事実上の**豊臣政権が樹立**した。

天正十五年（一五八七）

一月一日　秀吉　九州出陣の軍令を出す。戸次川の合戦の翌月、豊臣本隊が九州への進軍を開始。*31

二月　秀吉の弟秀長が出陣。*2三月上旬に小倉入り（出陣以来二十日後）。

三月　豊臣方は高野山の僧木食応其を使者として府内城の島津義弘に講和を勧めたが拒否。義弘は豊後松尾城（豊後大野市）の島津家久と共に撤退し、北部九州を放棄して、薩摩・大隅・日向の護りを固める方針に転換した。

三月一日　秀吉　大坂を出立した。総勢二十万の兵で九州征伐に大坂から出陣。

三月十九日　島津　島津義弘は高城（宮崎県児湯軍木城町）に撤退。義弘・家久は共に都於郡城（宮崎県西都市）に退く義久含め三人で軍議。

天正十五年（一五八七）

三月二十一日秀吉　黒田孝高に九州征伐の陣立朱印状（三月二十一日付）を宛てる。

【日向の陣立】一番隊黒田孝高・蜂須賀家政、二番隊小早川隆景・吉川元長、三番隊毛利輝元、四番隊宇喜多秀家・因幡衆（五大名）、五番隊小早川秀秋、番外筒井定次・溝口秀勝・森忠政・大友義統・脇坂安治・加藤嘉明・九鬼嘉隆・長宗我部元親）。

総大将　豊臣秀長*32　注：前田利勝：天正十七年利家に改名、初名利勝に変更。

毛利輝元が秀吉を山口で案内。*2

三月二十二日　旧宇都宮一族中間統胤は秀吉の九州入りの際黒田孝高の紹介下関に出迎え、豊前、山

三月　中間　国郷の情勢を進言し、領地二十町を加えるとの朱印状を得て一ッ戸城に帰城した。

（中間氏は宇都宮の直系で大友傘下であったが、頭越しに黒田に密書を送る。

また門司にて秀吉に謁見したとの説もある）。統胤は宇都宮**鎮房**に対して「平生の誼をたちて黒田に従うべし」との恭順を進言した親書を送った。この密書は孝高の間者により披見され黒田方の信頼を勝ち取った。

鎮房は秀吉よりの島津征伐への参陣要請に応えず。嫡男**朝房**を参陣させた。

赤間関着、秀長と戦略会議で陣立て、進軍路を決める

総大将秀長：豊前→豊後→日向→薩摩、総大将秀吉：豊前→筑前→肥後→薩摩。

黒田孝高に九州征伐の陣立朱印状（三月二十五日付）を宛てる。

【肥後の陣立】一番隊毛利吉成・高橋元種・**城井朝房**、二番隊前野長康・赤松広英・明石則実・別所重宗、三番隊中川秀政・福島正則・高山長房、四番隊長岡忠興・岡本宗憲、五番隊丹羽長重・生駒親正、六番隊池田輝政・林為忠・稲葉貞通、七番隊長谷川秀一・青山忠元・木村重茲（しげこれ）、八番隊堀秀政・村上義明、九番隊蒲生氏郷、十番隊前田利勝、十一番隊豊臣秀勝、総大将豊臣秀吉※32

注：長岡忠興：元亀四年（一五七三）―慶長二十年（一六一五）は姓を細川から長岡。

九州入り小倉城着、軍勢は総勢二十万。二十九日豊前馬ヶ岳（行橋市）に進軍、軍議。

軍陣の祭り、太閤殿下御前角力を小倉城内で奉納、六助三十七人勝抜き。

軍議：秋月種実の拠点古処山城（朝倉市秋月）、岩石城（添田町枡田）を攻めること決定→蒲生氏郷等により岩石城攻撃となる。

秀吉の小倉入り後、彦山座主・舜有は使僧を送って降伏を申し出たが許されず。※30

秀吉の九州征伐の当初は秋月と共に島津側であった。秀吉からの島津征伐に参陣せよとの命に評定が開かれ、鎮房は病と称して出陣せず、子の朝房が僅かな兵力で参陣。孝高は鎮房の有力家臣山田大膳の難攻不落の居城山田城（豊前市）攻略に、従兄弟である統胤に案内させ易々と落城させた。これで統胤は三万三千五百石に加増。※37

九番隊蒲生氏郷、十番隊前田利勝は堅固な秋月勢の豊前岩石城（田川郡添田町枡田）の攻城を主張し、一日で陥落させた。秋月の支城益富城（嘉麻市大隈）に居た秋月種

十八代当主鎮房

三月二十五日秀吉　秀吉

三月二十八日秀吉

『六助の義』

〈肥後の陣立〉

三月　**肥後の陣立**

三月　彦山

十八代当主鎮房

四月　**肥後の陣立**

実は、岩石城陥落に驚き筑前益富城を放棄し古処山城に退却。秀吉は五万の兵で古処山城を攻め、夜中に松明で威嚇、益富城は奉書紙で修復偽装し秋月の戦意を削ぎ、秋月種実、子種長は降伏。種実は剃髪、国府茶器樽柴肩衝と国俊の刀を秀吉に献上、息女**龍子**（後に末房の母）を人質に出して存続を許された。他の島津方は秀吉臣従へ。秋月が降ると彦山も抵抗を止め、座主舜有は秀吉のいる肥後南関へ赴き降伏の旨を伝えるも、許しを得られず、帰着すると病死した。これにより彦山の寺領は没収され、座主職は断絶。昌千代は座志代行として法灯を護り抜く。秀吉軍が彦山の麓に達し、座主自ら出頭して降伏を乞い許された。四方七里の領地は悉く没収された。*30*15

四月　彦山

天正十五年（一五八七）

四月十日　秀吉が高良山入り。十六日熊本入り。十九日八代入り、肥前龍造寺、島原有馬晴信が豊臣軍に帰参。島津忠辰は高田（八代市）から薩摩出水（出水市）に撤退した。

四月二十四日　豊臣軍先鋒が海路から出水に上陸。二十五日本隊が海路で川内（薩摩川内市）に上陸。

四月二十七日　秀吉が薩摩入り。薩摩浄土真宗勢力の利用の為、本願寺顕如を帯同し一向門徒の協力を得た。島津忠辰・宮之城（薩摩郡さつま町）の島津忠長が降伏。

四月二十八日島津　平佐城（薩摩川内市）最後の戦い。義久から桂忠詮に降伏の書状が届き、忠詮が降伏。

五月一日　秀吉が阿久根に入る。川内の泰平寺に本陣、桂忠詮に武勇を賞され名刀寶寿を下賜。

五月八日　泰平寺で剃髪の義久は秀吉に謁見し降伏。秀吉は義久の気概を見て赦免した。

五月二十三日大友　大友宗麟死去。

〈日向の陣立〉

三月　日向の陣立　秀長は日向松尾城（延岡市）を陥落。四月豊臣軍は耳川を渡り高城を包囲、兵糧攻め。

四月十七日　島津根白坂の戦い　松尾城支援に義久・義弘・家久が二万の兵で向かうも、豊臣軍の砦で逆包囲された。島津軍は敗退し都於郡城に、家久は佐土原城（宮崎市）まで退却。豊臣秀次が都於郡城を攻略、岩牟礼城（小林市）まで侵攻、義弘は飯野城（えびの市）に籠城。小早川隆景・黒田孝高の軍勢も加わる。二十一日島津義久は秀長に和睦を申し入れ。義久は高城を差し出し開城。小早川隆景・黒田孝高の軍勢も加わり高城は落城。*31

〈九州国分令〉

五月十三日　秀吉から弟秀長宛の書状に国分が記されていた。十八日秀吉は泰平寺から筑前に向う。飯野城の義弘の抵抗に対し子息島津久保を人質に差し出すことで義久の説得で降伏。

六月七日　秀吉　筑前筥崎八幡宮（福岡市東区）で九州国分令を発令した。

【九州国分令】島津義久：薩摩、島津義弘：大隅・日向、島津久保：真幸院（日向南部）、島津豊久：都於郡（宮崎県西都市）、佐土原、佐々成政：肥後、（後に加藤清正：肥後の北半分、小西行長：人吉を除く肥後の南半分）、相良頼房：肥後人吉、小早川隆景：筑前・筑後・肥前の一郡三十七万石、毛利秀包：小早川は領地の筑後三郡を割領、立花宗茂：筑後柳川城十三万二千石、黒田孝高：豊前六郡（京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の半郡）十二万五千石、毛利勝信：小倉・豊前二郡（企救、田川）六万石（国分令時に秀吉の命により旧名森吉成を改姓名）、大友義統：豊後・豊前宇佐の半郡（妙見・竜王に大友方田原家の居城）、龍造寺政家・木村喜前・松浦鎮信：肥前内の所領、宗：対馬、秋月種実：日向の櫛間（串間市）・財部（高鍋町）に移封、高橋元種：日向の縣（延岡市）・宮崎、伊東祐兵：日向の飫肥（おび）（日南市）・曾井・清武（宮崎市）。

〈豊前一揆・鎮房の叛逆〉

十八代当主鎮房　伊予国武藤甚右衛門跡二十万石の内鎮房に十八万石、朝房に六万石、四万石を毛利小三治に賜う（『宇都宮日記』）。（**朝房**に伊予国七万石を賜う（『宇都宮紀』））

十九代当主朝房　**朝房**のみに伊予十二万石又は上筑後二百町の転封の朱印状が与えられた。**鎮房**は**朝房**への朱印状を秀吉に返上した。朝房への所領安堵は沙汰止めとなった。

秀吉は帰順した国人に朱印状を出したが、現実は主力大名である小早川、佐々、黒田、毛利、立花らに所領され、国人はその配下となり、そこに不満が鬱積した。

黒田　豊前の新領主孝高は長野の居城馬ヶ岳城（豊前市）に入城、本拠とした。その後中津城の築城を指示。

天正十五年（一五八七）

十八代当主鎮房　**鎮房**は豊前の新領主が孝高となり激怒。上毛郡日熊城（城主日熊直次）に拠って反旗

六月七日　を翻した。*37
筑前の領主として小早川隆景が入る。彦山に二千石の寄進。
六月十九日　秀吉　肥前長崎港を視察、キリスト教によるポルトガル領的環境から開放する為、バテレン追放令を発す。深堀純賢を南蛮船通行料の徴収を海賊停止令違反として所領没収処分。
秀吉　帰阪の際、博多の修復・直轄化推進。備後に亡命の足利義昭を京都に連れ出家させる。
黒田　佐々成政の肥後で検地に反発した国人一揆が発生、援軍で出兵。
七月　黒田　肥後で国人一揆が発生し、秀吉は小早川・黒田・毛利・立花の出陣・制圧命令。
黒田孝高が中津より出陣、筑後まで進軍。

十八代当主鎮房

秀吉に対する所領の斡旋を小倉城城主毛利勝信に言上した。毛利勝信は**鎮房**の窮状に配慮して領内の田川郡赤郷の白土・柿原・成光の地を貸し、**鎮房**に開城し秀吉の沙汰を待つことを進言。**鎮房**・城井家一門は城井ノ上城を出て毛利勝信の領地赤郷を借り、九日に城井家一家は赤郷に移住。黒田は城井谷の大平城に大村助右衛門を城代とした。
緒方・野仲　黒田軍の遠征の虚を突き、肥後国人一揆に呼応し**城井鎮房**、野仲鎮兼の国人が豊前一揆を起す。黒田勢は制圧出来ず拮抗が続く。
十月**十八代当主鎮房**　秀吉からの沙汰が無く豊前内の一揆の機会を捉え**鎮房**は蜂起。三百余名で黒田の家臣木村助右衛門が城代として護る萱切城を攻略。城井家旧臣の八千八百余名が呼応した。

【蜂起した諸将】
九十九城（別名不動ヶ岳城）（福岡県みやこ町犀川）：九十九玄蕃、西郷城（福岡県みやこ町犀川）：西郷形部、日吉城または高祖城（福岡県糸島市）：原田伊予守嘉種、求菩提城（福岡県豊前市・築上町）：塩田内記、障子ヶ岳城（福岡県みやこ町）：添田雅楽介、光明寺城（大分県宇佐市院内町）：友枝忠兵衛、角田砦（福岡県豊前市中村）：八屋隠岐守、岩石城（福岡県添田町）：佐々木種次、広田城：爪田右衛門尉、海老名城（福岡県豊前市川底）：末松房快、篠瀬城（別名四ノ瀬城）（福岡県豊前市篠瀬）：渡辺右京進義督、神楽城（福岡県みやこ町）：城井常陸介、川底城（福岡県豊前市

川底）：城井弥七郎、如法寺城（福岡県豊前市山内）：如法寺輝則、緒方城（福岡県上毛町）：緒方惟綱、日隈城（福岡県上毛町）：日隈直次、池永城（大分県中津市上宮永）：池永重則（兼大貞八幡神官）、福島城（中津市田丸）：佐渡守鎮充、大畑城（中津市大幡）：加来統直、長岩城（中津市耶馬渓町）：野仲鎮兼。

【鎮房の蜂起前に離反した諸将】

一ッ戸城（大分県中津市耶馬渓町）：中間統種、長岩城落城後に無血開城。

居城**大平城**（福岡県築上町寒田、標高四百八十米）を出て**赤郷**（福岡県赤村）**へ転居。**

肥後新領主佐々成政の検地強行と課役に反対する農民、国人らによる一揆が勃発した。秀吉の命で小早川隆景、黒田、毛利秀包、立花宗茂らの諸大名が一揆鎮圧に向った。長政に馬ヶ岳城の留守を任せ、孝高は兵を率いて築後国府（久留米）まで出陣した。

十八代当主鎮房

九月　肥後一揆

黒田孝高

〈黒田の第一次城井谷攻め〉

十月　黒田の軍勢は広幡城を攻略し城井谷を見下ろす小山田城に攻め上がる。毛利輝元は叔父の筑前領主小早川隆景、吉川広家（毛利元春の子）二万の軍勢を派遣したが、地勢を背景に鎮房に敗退。宇都宮方の諸将：岡橋高鷲助、八幡兵介、野間源蔵、榛谷荒次郎、黒田方の諸将　：小野江小弁。黒田孝高は秀吉に救援を求めた。

天正十五年（一五八七）

十月　豊前一揆　豊前上毛郡で宇都宮一族の如法寺輝則、緒方惟綱、日熊直次、有吉内記らが一揆に立上り姫熊山（福岡県上毛町）に籠る。黒田長政は千三百騎で城兵三百、支援五百で護る上毛郡日熊城を落城させ、上毛郡の諸城主（如法寺久明、鬼木惟宗、山田輝家、山田親光、八屋刑部、緒方帯同内尾兼元等）は連合して直次を支援したが、観音原で長政に敗れた。長政は上毛郡の一揆を鎮圧し馬ヶ岳城に戻る。

十八代当主鎮房

赤郷の鎮房も反豊臣・黒田で挙兵した。黒田の将大村助右衛門が守護する大平城を奪還して入城した。鎮房の室静、嫡男朝房と室龍子、鎮房の娘鶴姫ら家族及び一門・家来達で籠城。鎮房の挙兵に呼応して求菩提山の山伏も蜂起した。

黒田長政は**鎮房**の籠る鬼ヶ城を二千の兵で攻めるも敗北した。
上毛・下毛・宇佐の三郡の国人が挙兵し犬丸賀来、福島の城に立て籠もる。
長政は馬ヶ岳城から広津城（吉富町）に向い、上毛郡観音原で鬼木掃部を討ち取る。

〈黒田の第二次城井谷攻め〉

黒田長政は神楽山（みやこ町）に向城を築き、城井宇都宮家の往来（情報・兵站）を断つ。上毛・下毛の城井家旧家臣が護る城を次々と攻略。
兵糧つき毛利輝元・勝信（別名森吉成、秀吉の家臣）に調停を要請。毛利家安国寺恵瓊、山口正弘（秀吉の側近、小早川秀秋（豊臣秀秋）を補佐）が調停し、和睦条件「城井家の所領安堵、**鎮房**の嫡男**朝房**十九歳、娘鶴姫十三歳を黒田の人質に」が成立。
肥後一揆の佐々成政の助勢に黒田孝高が向う時、豊前上毛郡緒方村の緒方城城主緒方十六朗惟綱が国人一揆を主導、秀吉の検地へ反抗。黒田長政軍は緒方城（佐井川の日熊城の近く）は落城。日熊城主日熊小次郎直次等と討死。一揆は十二月終息。
九州国分令により、秋月種実、種長は筑前国古処山城より日向国高鍋城に、三十六万石から三万石に減封となった。種実は「十石でも秋月の地に残りたい」との願いが叶わず、家督を嫡男種長に継ぎ隠居した。
長政は如法寺庄川底で円藤源兵衛を討取る。後に伊藤田・中尾・山田・八屋が滅んだ。
黒田の攻勢の前に犬丸城、賀来城、福島城が陥落した。
一揆の事態を秀吉に報告し、帰城して企救の毛利勝信、中国の毛利輝元に援軍を要請した。一揆の鎮圧は進んだが、大平城の**鎮房**の攻略に手をこまねいた。
鎮房は、窮状打開の為に小早川隆景、毛利勝信、安国寺恵瓊を仲介に、黒田孝高に和議を申し入れ、嫡子弥三郎（朝房）と妹鶴姫を人質に出した。黒田は領内を平定。
籠城は一説では、城井谷の寒田の奥で、鬼ヶ城（城井ノ上城か）であった。

〈城井宇都宮家滅亡・末房お家再興へ苦闘〉

天正十六年（一五八八）：**宇都宮末房（後の朝末）誕生**

秀吉　毛利、長宗我部、島津の有力大名は存命し臣従し留まる。毛利は客分大名で優遇。

十八代当主鎮房

十一月　豊前一揆

秋月

十一月

十二月

黒田孝高

十八代当主鎮房

立花宗茂は上洛、従五位下、侍従に叙任、羽柴名字と豊臣姓を授与さる。
秀吉は九州征伐の先鋒を務めた宗茂に褒賞として筑後柳川十三万二千石を与え、大友から独立した直臣大名に取り立てた。同時に従四位下侍従に叙任、左近将監と称した。

三月　黒田秀吉輝元　中津城を山国川河口に日本三大水城として完成させた。

三月　黒田　長崎を直轄領、長崎・平戸に輸入交易を固定し海賊行為を停止させた。*16

三月二十六日**朝房**　上洛。大坂城を見て居城郡山城に代わる広島城築城を決意。*16

天正十六年（一五八八）　長政は下毛郡の諸城（池永城、田丸城、大畑城、犬丸城）を攻め落城させた。

四月五日　**野仲**　秀吉の命で肥後国検地の監検地に任ぜられる。

長岩城落城。黒田長政は上毛郡、下毛郡の野仲の属城を滅ぼし孤立する津民城に後藤又兵衛を先陣とし三千五百騎を率いて長岩城を遠巻きにした。野仲重兼は郷士千五百人と共に君臣死を決して護り堅く防戦の用意を怠らず長政軍を笹が峰に移し、漸く城下に進み来て城兵の抽木原にあるものを撃って出た。是より両軍互いに迫って戈を交わし、三昼夜激戦したるも勝敗を決し得なかった。「城井闘争記」では「城兵銃砲を以て狙撃し、敵兵三百余人を死すと雖も多数の敵軍少しも撓まず、竹束、巨板を以て銃丸を防ぎ、愈々勇進して城壁に迫り来るも、此城絶崖雲に聳え、容易に落つべき様もなかりけり」、然るに百富河内は密かに敵に通じており、敵兵を誘い入れたので、城中俄かに動揺して城は忽ち陥った。鎮兼は族党三十三人を召し寄せ今様を高らかに謡い最後の酒宴を潔く終わり、割腹し、続いて三十余人悉く自害し、築城以来三百九十年野仲家は遂に滅びた。その時森駿河守が辞世の句を残した。

　咲く時は花の数にはあらねども　散るには漏れぬ山桜かな　*32

四月十四日　**朝房**　黒田孝高と共に肥後国人一揆の鎮圧に向かう。

四月二十日　**鎮房**　中津城にて黒田長政により謀殺された。**城井家滅亡**（末房の曾祖父**長房**・祖父**鎮房**）。

四月二十三日**朝房**　黒田孝高に従軍の**朝房**は肥後国玉名郡木葉で加藤清正の手下により討死。享年十九。
従者：高司日向守、池永善助、小路源次郎、松田弥五郎、神埼三郎右衛門、畠中六郎

左衛門、白川作太夫、末松出雲守、高瀬清兵衛、松尾弥兵衛、有野与五郎、逸見新六。
四月二十四日**鶴姫**　侍女らと共に山国川広津川原で殺害された。
十一月**末房（朝末）**　**朝末**の母龍子は彦山の南方の宝珠山に逃れ**末房**（幼名、後に**朝末**）**誕生**。幼名は城井家代々で継承の「房」に、行く「末」まで実り大きくなる事を願いが込められた。
六月　山国　黒田孝高が中津藩主となる。槻木は中津藩津民組槻木村となる。

天正十七年（一五八九）：**末房（朝末）一歳**
　秀吉　関東へ遠征、小田原城を包囲し三ヶ月後に北条家政・氏直父子は降伏。
　伊達政宗等東北の大名も恭順の意を示し、事実上の**天下統一**なる。
三月　黒田　長政三千の兵で宇佐郡の諸城（中島城、小倉城、乙女城、光岡城、土井城）を攻略。
四月二十日　長政の招きで**鎮房**は二十三騎（渡辺右京・渡辺与十郎・松田小吉・遠藤吉兵衛・吉岡八大夫等）で中津城に登城。

十八代当主鎮房
十七代当主長房

六月　高鍋秋月　黒田孝高は数千騎を率い城井谷に向い、池永善左衛門を介して、**鎮房**、**朝房**の処断を、長房に申し聞かせ、鎮房の内室、朝房の妹二人を孝高に渡した。

天正十八年（一五九〇）：**末房（朝末）二歳**
　秀吉　秀吉は全国検地で石高制施行を目指す。秋月は丈量表示（種長「福島院西方坪付帳」）。
　小田原征伐。立花宗茂も従軍。秀吉曰く「東に本多忠勝、西に宗茂、天下無双の大将」

天正十九年（一五九一）：**末房（朝末）三歳**
　秀吉　後継鶴丸二歳で病死。関白に甥秀次を養子として相続、
　東北で南部一族内の反乱で、秀次を総大将に出兵し九戸一族を殲滅。

文禄元年（一五九二）：**末房（朝末）四歳**
一月　秀吉　朝鮮文禄の役。九州、四国、中国の諸大名へ三月以降の朝鮮出兵を指令した。
四月　秀吉　島津義弘・久保父子、伊東祐兵、高橋元種、秋月種長、北郷忠虎らの第四陣が出陣。
　末房（朝末）　相良頼房（七年後、母**龍子**の再嫁先の肥後国人吉藩初代藩主）文禄の役で朝鮮へ出兵。

文禄二年（一五九三）：**末房（朝末）五歳**
　末房（朝末）　母**龍子**は日向秋月家へ、末房は大坂秋月種実のもとへと親子は離別。

文禄三年（一五九四）：**末房（朝末）六歳**

七月　秀吉　役中、太閤検地を強行。石田光成に薩摩・大隅・日向検地の命が下り実施された。
これは軍役の設定と動員力の確保、石高見直しの狙いがあった。

文禄四年（一五九五）：**末房（朝末）七歳**

末房（朝末）　相良頼房、朝鮮より帰国。**末房**、大坂暮し。
毛利　毛利輝元は家康・前田利家・宇喜多秀家・小早川隆景とともに五大名となる。

文禄五年（一五九六）：**末房（朝末）八歳**

末房（朝末）　朝末は秋月種実と在坂であったが、種実老衰（病状悪化）で日向に帰国、末房も随行。
九月二十六日　種実は日向高鍋で歿す。享年四十九。

慶長元年（一五九六）　文禄五年十月二十七日改元

慶長二年（一五九七）：**末房（朝末）九歳**

日向国高鍋の秋月家は櫛間城へ移り居城とした。

二月　朝鮮慶長の役始まる。黒田長政・相良長毎（さがらながつね）、島津豊久（兵八百）、高橋元種（六百）、
秋月種長（三百）、伊東祐兵（五百）、島津義弘（一万）に出陣命令。

九月　**下野宇都宮国綱、秀吉により改易処分**、備前国に配流。

十二月十四日　秀吉　松平忠昌、大坂で誕生。後に徳川家康との面識の仲立者で秋月種実は大坂で親交。
秀吉　禁教令違反としてイエズス会宣教師及び日本人二十人計二十六人を処刑。
小早川秀秋を元帥とし十四万の軍を再度出兵。漆川梁海戦で勝利。

慶長三年（一五九八）：**末房（朝末）十歳**

七月　秀吉　伏見城に家康等諸大名を呼び、秀頼の後見人を依頼。

八月　秀吉　伏見城で生涯を終える。朝鮮慶長の役終り、朝鮮より兵力を撤退した。

慶長四年（一五九九）：**末房（朝末）十一歳**

三月　家康　徳川家康は豊臣秀頼の後見人前田利家の死と石田光成の失脚で大坂城に入る。
五大老・五奉行制が崩壊した。

六月八日**末房（朝末）**　母**龍子**は肥後国人吉藩初代藩主相良頼房（相良氏第二十代当主）に嫁ぐ。母と離別。

慶長五年（一六〇〇）：**末房（朝末）十二歳**

六月　家康　上杉景勝の上洛拒否で会津攻めの出陣。

七月　豊臣　石田光成ら西軍が決起。東軍：伊東祐兵、西軍：島津義弘、豊久父子、高橋元種、秋月種長の日向国西軍諸大名は東軍伏見城を落城させ、大垣城に向い籠城。

九月**関ヶ原の戦い**　十五日徳川方が勝利。大垣城の秋月・高橋は西軍の敗戦を知り、籠城組の熊谷直盛らを討ち取り徳川方に寝返った。島津義弘と日向の豊久は井伊直政に追撃され豊久は戦死。義弘は鈴鹿峠を越えて伊賀上野、和泉を経由して堺に出て出港、人質の義弘・忠常、秋月種長の妻らと西宮沖で合流。七日間で二十九日日向国細島へ着いた。

十月　秋月・高橋両氏も日向国に帰還。

慶長六年（一六〇一）：**末房（朝末）十三歳**

黒田長政は関ヶ原の第一功労者として徳川家康より筑前国名島に五十二万余石移封。中津藩から筑前国福岡（博多）に移り初代福岡藩主となる。細川忠興は丹後宮津より豊前国及び豊後国国東郡・速見郡三十九万余穀石で入封し中津城に入城した。

慶長七年（一六〇二）：**末房（朝末）十四歳**　細川忠興は藩庁を中津から小倉に移した。

慶長八年（一六〇三）：**末房（朝末）十五歳**　**徳川幕府開幕**、幕藩制度が始まる。

慶長九年（一六〇四）：**末房（朝末）十六歳**

高鍋秋月　櫛間城（宮崎県串間市）から財部（たからべ）（同県高鍋町）の高鍋城へ再び移り普請開始。

慶長十二年（一六〇七）：**末房（朝末）十九歳**　松平忠昌（九歳）は姉ヶ崎藩一万石を下賜。

慶長十三年（一六〇八）：**末房（朝末）二十歳**

末房（朝末）　**末房**は松平忠昌（十歳）に仕官。

慶長十四年（一六〇九）：**末房（朝末）二十一歳**

末房（朝末）　**末房**は下野宇都宮家へ挨拶まわり、城井家再興の協力依頼。

慶長十五年（一六一〇）：**末房（朝末）二十二歳**

末房（朝末）　このころ**末房**は婚姻か。子息に**春房**がいた。

慶長十六年（一六一一）：**末房（朝末）二十三歳**　六月、加藤清正歿す。享年五十。

慶長十七年（一六一二）：**末房（朝末）二十四歳**

慶長十八年（一六一三）：**末房（以下朝末）二十五歳**

七月**『城井谷の蓬花』**松平忠昌（十五歳）に随行し徳川家康に謁見。家康より**朝末**を賜る。

家康より大坂冬の陣の参陣の要請あり。要請を受けて、

朝末が下野国宇都宮家に家康の城井家再興の手形を出した事を伝える。

朝末が日向秋月家に家康の城井家再興の手形を出した事を伝える。

朝末が城井谷に帰郷。旧臣に挙兵準備を伝える（家康の命を受け直ぐに行動）。

高橋元種は嫡子左京と共に奥州棚倉（福島県）に配流となった。

十一月

慶長十九年（一六一四）：**朝末二十六歳**

十一月**大坂冬の陣**　幕府方家康・秀忠二十万対豊臣秀頼九万の戦い。松平忠昌（十六歳）は徳川秀忠に随行。**朝末**率いる宇都宮軍の軍影なし。十九日木津川口の戦いが口火、幕府方の攻勢で豊臣方は大坂城に退却、包囲された。真田丸・城南の攻防戦を展開。

幕府方は大砲砲撃を開始。幕府方は食糧不足に陥り和議交渉を開始。二十日和議成立（条件は本丸を残し、二の丸・三の丸の外堀埋める）。二十三日外堀埋め完了。

幕府方は大坂を退き払い、家康は駿府へ、秀忠は伏見に戻る。

十二月

慶長二十年（一六一五）**（朝末二十七歳）**

四月　**大坂夏の陣**　幕府方家康・秀忠十六万五千対豊臣秀頼五万五千の戦い。元服の松平忠昌十七歳は兄忠直の一隊で出陣。豊臣方は、籠城戦は不利として大和郡山城攻め野戦展開した。

五月道明寺・誉田合戦で勇将後藤基次が討死、八尾・若江合戦で豊臣方は徳川本陣十二万を迎撃。天王寺・岡山合戦で豊臣方は総倒れとなり大坂城内に退却した。

大坂城天守閣が陥落。秀頼は自害。子国松は捕えられ処刑、娘天秀尼は僧籍で助命。

元和元年（一六一五）慶長二十年七月十三日改元

元和二年（一六一六）**（朝末二十八歳）**—寛永十年（一六三三）**（朝末四十五歳）**は**朝末の事績無し**略す。

寛永十一年（一六三四）**（朝末四十六歳）**

朝末　**朝末**の母**龍子**六十三歳で没した。

元禄三年（一六九〇）

信隆　**朝末**の孫**信隆**（**春房**の子、高房）が越前松平家に仕官。

さらば、パクス・城井

『城井谷の蓬花』　付録

城井宇都宮家三百九十年の治世とその心髄

【変更履歴】

２０２０年６月　HP『郷土の昔物語り』で開示（Ver. 1. 0）

著者　梅津　三男
発行者　梅津　三男